



改 贈
心 蒲
何 社 家 時 記 葉 子
四

^ 5
678
4





利門
號 678
卷 4

明治卅六年十一月五日

坪内如藏氏寄贈

增補 伴諧歲時記草

江戸 曲亭主人纂輯
監亭青島增補



漢書律曆志太陰者北方北伏也陽氣伏於下於時為冬冬終也物終藏乃可

稱ス於下於時為冬冬終也物終藏乃可
帝○魏相曰北方之神ハ玄冥ハ神

月令冬月其帝顓頊其神玄冥ハ顓頊黑精

之君玄冥水官之臣少皞氏之子曰脩曰熙

相代為ハ應鍾ハ律月令廣義鍾者動也言

水官ハ物應陽而動下藏也

立ハ冬ハ同上考經緯云霜降後十五日斗指

也ハ小ハ雪ハ同上立冬後十五日斗指亥為小

則為雪時言者寒ハ孟冬ハ廣韻孟冬也始也

未深而雪未大也ハ孟冬ハ冬始故曰孟冬

析木ハ通俗志作析木誤矣當作析木ハ禮記

鄭玄注孟冬者日月會於析木之律



而斗建あうけん上天あまのて爾雅に冬為ふゆ玄英げんえい爾雅に冬為ふゆ玄英げんえい一日

安寧註云氣黑而あんない羽音うよくん律中應鍾りつちゆうおうえい

檀だん歲華紀麗さいけいれい感かん清商而律變せいしやうりつへん云入曰いり槐かゐ

月之本十月檀檀陰木也周礼しうり冬取槐檀之と火ひ按あむむ小律檀檀木之火と取と律と改かじじるる

の義ぎ小也せう

十月陽月爾雅に十月為陽月孫炎註云此こ月げつ或始ある于し亥え生于う子し十月建た亥え為な陽やう之し始し故ゆ

十月純陰而稱陽月以陽根于陰為之始し

良月りやうげつ左傳に魯公叔申奪衛三年而復之しん上じやう

冬ふゆ纂要に十月曰い七しち玄冬げんとう同上どうじやう冬曰い玄げん秦しん

正月令廣義に秦以十月しん初冬しゆとう和哥式に初冬ハし十月朔日の心とし

もよも又ハ冬來てき三日の心ともいふし時雨月じこ藏王ざうわうあらしあらしてし

くも月冬ふゆのししめし初霜月しゆそうげつ同上どうじやう草と木もくさ

何とをなんまままま定家じやうけ神無月かみなづき俳諧歲時記に奥おく

人のひとととまま長明ちやうめい儀抄ぎしやうこの月諸しよ

神出雲國の大社かみいづも集あつまま故ゆふふ名なづづくととありあつつれれ

草くさやや此こ月げつ大神宮おほいのの御許みこ諸神しよじんああままりりのの故ゆふふ

名なづづくととありありり又また貞治けいじのの頃ころ藤ふじ沢さく山やまのの沙さ門もん由ゆ阿あ賀が葉は

集あつのの注しゆとと詞ことば林りん采さい葉は抄しやうとといいふふの中なか小せう天下てんかのの神かみ

無月なづきとと出い雲國いづも中ちゆうのの神かみ有ありり月げつとともも神かみ月げつとともも申まをすす

諸神しよじんのの集あつままるることこともも故ゆここのの神かみ在あるるのの浦うらふふ神かみ々々未ま臨りんのの

時とき小童せうどうのの作しやうままるるかか如ごときき茶ちや舟ふね波なみの上うへ浮うぶぶここ數かずももありありり

をを諸神しよじんハハ此こ浦うらのの神かみ在あるるのの社やしろ集あつままるるゆゆひひてて大社おほいへへ赤せき

大明神あきほとと申まをすす是こ則すなはちち傳つたへへ奏そうのの神かみ也なり傳つたへへままりり云いふふ

冬

この説異端小近し、入出雲ふさの事ありとて、
 一天下のうち何ぞ神ありといふ月ありとて、荷田東麻呂
呂親の説ふ神無月ハ雷無月ハ十月ハ純陰の月あり
ハ雷の声收りしを故ふりハ六月ハ雷鳴月とい
 ふふ對ありと、これ古人未發の論あり、雷と神との
いふハ萬葉小神の如聞つる瀧とよめるとて、後撰集ふ
 ちいなる神のありぬ我中の雲ぬらうふあつとて
 ゆくの歌と詠ると雷神と又伊勢物語ふ神さへのみ
 ちい入又云神あるささきふ云此外證歌多し○青
 藍云世諺問答ハ此月と神無月と申ハ伊弉册尊
 崩りし月あり申云貝原篤信翁ハ此月ハ卦小
 おと坤と純陰事を用ひて一陽未復陽無の月
 神ハ陽の靈陽ありとて神と云ふと云ふと云ふ
 との荷田大人の説至當といふハ、此月諸神出雲國
 ハ集りし故ハ神無月といふ説ハ甚じき妄談と
 といふも、俳諧ハ趣のささきふささきひて句作を盡し
 五元集高砂也称宜の
 湯治の神無月其角

十月 黄鍾

律月令仲冬月律中黄鍾高誘
 注云鍾衆也陽氣聚于黄泉

大雪

節月令廣義孝經緯云小雪後十
 五日斗指壬為大雪十一月節

仲冬

月令仲冬
 之月云

復月

五月一陰生
 至十一月一

暢月

禮記注暢克也言
 所以不可殺泄者

雪見月

藏王くもりつる空のささ
 小雪見月けこと冬の

享月

淮南子仲冬之
 月命曰享月

神樂月

藏王まらさそも
 の言居の神樂月

月建子周正月是
 曆家曰天正月

冬

たのこまき葉の音のやまき定家○露水云陽交
わらわを神の岩戸より出らふ比して神樂と奏を
る月といふよりいまで此月五節の舞をくもあり又東
三条の御神樂ホと行はるゆゑ名づけたりあり
霜降月 霜より月の空よりや雪けとて是を曇り
らん

十二月大呂 律高秀注呂侶也萬物萌動于
下未能達見所以配黃鐘助

陽宣 節月令廣義孝經緯云冬至 大
功也 小寒 後十五日斗指癸為小寒

寒 中同上小寒後十五 季冬 月令季冬
日斗指丑為大寒

臘月 說文冬至後三戌為臘祭百神也漢以
戌日為臘魏以辰日晉以丑日 禮傳臘

者獵也因獵取獸以祭先祖 蒸鬻芻蕘
臘者歲終大祭也故小臘月といふ 涂月

月令斗建丑之 夏以十二月為正殷以
辰一日涂月 殷正 十二月為正周以十一

月為正故有 周年 文選舞鶴賦助陰殺節急
殷正之名 景周年云周年八年の周落

急景 月令廣義窮冬 窮月 禮記季冬
日景短急云 窮月 之月日窮

干次月窮干紀星廻干天數將終終注云日月
星辰運行至此皆逆故處也次舍也紀猶會

霜蟾 蟾八月中小蟾蟾あつといふ月 霜降
といふ霜蟾といふ霜夜の月の事 霜降ら

ふれ秋冬の月皆霜蟾といへし陳與義が秋夜詠
月詩も映霜蟾といへるなり冬の月も限りし

殊更十二月の異名の十不雜て増山の 弟月 此月
井不出せり翰墨大全の意不審也

年中月の終まり故俗ふこ子月 春待月
和の諺ふ末の子こ子と称されん

藏玉 これてゆゑといふ身ふそくわふと 梅初月 藏
と交待月ののそつきつね長明

冬

花ハまことつわむをさうにほのころぞて
梅もつ月のころろのちめく、頭昭
三冬月 蔵玉
あつたきとつわむをさうにほのころぞて
いそふつとつわむをさうにほのころぞて
定家

十月 亥の子 射場
こけの部玄指のいむ
条下ふ注を

始
公事根源 光此月の三日ふ左右衛門守の堀と
はるる、その日ハ天子もを殿ふ出させあひて弓を
御覧せよ也公卿以下束帯あてこれをいふ天子御射
席をちりせて弓矢と御座の左右のころきふめていふ是
と群臣といふとくくしと射あふりあふり裁ふ文武二ツ
の道ハ一とくくくくくくく故武をさうらとせめてあふり
○江次第ふ十月五日射場始注蔵人
式七日ハ五日ハ残菊の宴ふりてこ

兼三冬物
善三冬物

凍
宇彙孟冬 江湖の産魚ハ大きき
始て凍る、鮧 ちりんの漸一寸五分寸ふ満ごもの
多し、頭口大きく尾細し、これを煮食ふ不腥く佳品
らむ冬月和尔堅田地の漁人多くこれを取賤民賞

勇魚取
万葉伊沙那
今いふく

十月 卒川祭
上酉日夏の
さの部

十二月 忌日御飯
朔日 公事根源六
月ふおひり

鰯の頭柿
せの部節分
の条下注を

十月 爐開
あつたきとつわむをさうにほのころぞて
あつたきとつわむをさうにほのころぞて
あつたきとつわむをさうにほのころぞて
あつたきとつわむをさうにほのころぞて

進爐炭
煖爐會 事文類聚 十月の朔有司
煖爐炭と進民間置酒して

兼三冬物 爐
和漢三才圖會 地爐和
名炭櫃の畧茶湯ふ

十二月 臘日
風俗通 禮傳
云夏不嘉平と

冬
いろは

て醜もと 積叢集 時雨きや
並ふうのくもこのうへ船 千律師

三枝祭の
あつたきとつわむをさうにほのころぞて

煖炉會とあつたきとつわむをさうにほのころぞて
て乃腎肉とあつたきとつわむをさうにほのころぞて

とをを用へ只爐と
糸方一尺四寸

冬

いん 餃せうせう清祀せいせいといふ周しゅう大蜡だいさくといふ漢かん改かて臘ろうといふ臘ろうハ
臘ろうより獸けつを臘ろうし取とて先祖せんぞを祭まつるなり説文せつもん至いたるの後のち
三戌臘さんしゅうろうハ百神ひやくしんと祭まつる徐錯じよさく曰いふ臘ろうハ粥じゆくの部ぶ温糲んらく
臘ろうハ合あはせ諸神しよしんと合あはせ祭まつる

蠟梅 らうばい 時珍曰ときちんいふ蠟梅らうばい一名黃梅いもうめい花はな此者こゝろ梅うめの類るいハ
蜜蠟みつろう小似ちひさか故ゆゑ此名こゝろと得え天和本草てんわほんそう蠟梅らうばい近年ちきんねん中華
よりやま臘月ろうげつ小ちひさ黄花くわんわと開ひらく蘭らんの香かほ不あ似したり葉はハ
折をり兼あ小似ちひさて小ちひさりて長ながし木きの高たかと三尺さんせき四よ尺せきり
過あぎ大坂おほさかて唐梅たうばいといふ梅うめの類るいハあらど○臘月ろうげつハ咲
の義ぎハいわも其その花はな黃わう紫そく色しきの部ぶ燕えん喰く
小似ちひさくり故ゆゑ蠟梅らうばいと名なづく鹿膏ろくかうの条じょうより出でつ

は は **十月拜墳** じゆっがつはいふん 日ひ 要筆録ようひつろく 十月じゆっがつの朔しよく都城ていじゆ
の土度ど皆みな城じやうと出でて墳ふんを

朝あとも寒食かんとくの節せふの如ごとし
芭蕉忌 ばせうき 十日じゆっにち俳諧はいかい正風せいふう
體たいの開祖かいそ

芭蕉ばせう菴あん桃青たうせう翁おんの忌日きじつあり泊船堂はくせんどう杖錢子じやうせんし是佛坊ぜつぱく
風羅坊ふうらぱくホの号ごうあり又無名庵むななあん幻住菴くわんじゆうあん菴あん出庵であん瓢竹菴べうちやくあん

ホの庵号あんごうあり下論為辨抄 支考 故ゆゑ翁おんの推名おしなハ金作きんさく
といふも伊賀いげ小四姓せうしやうせいありて桃地黨たうちとうの中の松尾まつお氏うぢ
ありとむり俳諧はいかいの名なハ宗房そうぼうといふ落髮らくぱつの後のちハ桃
姓せいのひきより桃青たうせうといふりるりハ梅子うめこ熟じゆくせ居ゐの意い
ありと如ごとしおおの家名けなをとけるものひからん十九じゅうの
年ねんハ官くわんと志しをもきて洛陽らくやうハ李季吟りきぎんを師しとし武陵ふじようハ其
角かく嵐雪らんせつと門人もんじんとせり深川ふかがわの芭蕉ばせう菴あんハ隱遁いんとんありて
三十六さんじゅうろくのちとて風俗文選ふうじやくぶんせん 許あき 作者しやくしや列傳りやくでんハ芭蕉
翁おんハ伊賀いげの人ひと武名ぶなハ松尾まつお甚じ七しち郎らう當たうて世よ功こうと遺いえ
と武ぶの小石川せうしやくわんの水道すいどうを修しゆして四年しよねんハ成なりる速すみハ功こうと
捨て深川ふかがわ芭蕉ばせう菴あんハ入いる年ねん三十七さんじゅうしち 支考ハ三 **芭蕉ばせう翁おん**
正傳せいでん 蘇堂家藩竹二坊 芭蕉ばせう翁おん桃青たうせうハ伊賀國いげこく阿拜郡あはいごほり
拓植村たくせきむらの人ひとありて俗称じやくせう松尾まつお半七はんしち後のちハ改かへて松尾忠告まつおとんこ工門こうもん
宗房そうぼうと号ごう正保元せいほうげん甲申きやうしんの年ねんの生なれりて弥平やへい兵衛べいゑ宗清そうせう
苗裔めうゑいありて宗房そうぼうと名なづく父ちちの名な儀ぎを衛門ゑもん母はは
ハ豫州よしゅう宇和島うわしまの産うりて桃地たうち氏うぢの娘むすめあり支考ハ翁の翁の碑
名なハ其その先せんハ桃地たうちの黨とうとも也なり今いまの氏うぢハ松尾まつおといふりて書
ハ母ははの氏うぢと聞きあれりしものハ弥平やへい兵衛べいゑ宗清そうせうが屋

敷跡今も存り庭ふ大なる石の手水鉢あり人々まこと名物とす其類今同郷ふ姓とて梧桐植氏松尾文福地氏亦是なり儀左工門嫡子與左工門上野赤坂町ふ手跡師範と以て家業とて次男半左工門藤堂三駿長基の臣とて三男忠右工門芭蕉の寛文壬寅年藤堂新七郎良精の臣とて夫より嫡子主計良忠俳名蟬吟へ隨身と伊賀上野桐西筆記桐西の門人蟬吟子ハ洛の季吟俳諧と學び申さる故ふ羽もとり其門ふ入ていぬとて此世の中より西の年と発句あり十四歳の時明曆三より小蟬吟子ハ不幸はて寛文六年の四月世と早しし故ふ翁ハ君臣の因風雅の縁いとありぬ數のあまゝ遺骨を負く高野山ふ登り報恩院ふ納く六月帰國とてこの後公うに道世の志ありてや二君ふ仕へざるはと告てふよりふ暇と乞ひ申さるるをあてのしりしやふ其秋ふらん同僚孫太夫といふ者の門ふ短冊を拈けり雲とてらう友や雁のいささかといふ一句と残し國と去る

歷代滑稽傳 許六 芭蕉翁桃青ハ伊賀の産江戸小居

て俳諧は鳴る桃青二十奇仙といふ俳書と著二十奇仙塙吟の内膾声波とて腸氷る夜ハ涙子とぬり鯨の其声なり一才二の弦とてくくとも牛房と刻む前後名を出しつゝ撰集ハ二十奇仙一部ハ談林の時俳書ふ長し日々向上ふすりあげ終ふ談林と見破りはじめて正風体と見届躬恒貫之の本情と探始て道の辺の木槿ハ馬ふくをれらると申されり天下舉て俳諧中與の開祖正風の翁と称し侍る天下の門入數千人のうち慥ハ正風の体と得るもの少し初懐紙の項杉風嵐蘭其角嵐雪曾良亦江戸ふ在て隨仕子其らう故郷伊賀ふ立帰たる道の紀と草枕とも野ざらしの紀行ともいふ大津の千那尚白青垂三人師としていひ辛奇の松ハ花より麗とて此とてこの事ハ名古屋めて野水荷ふりらの杜田冬の日俳諧と撰し次の春春の日むつぎ曠野ハ俳諧と勸む風体冬の日春の日ハ初懐紙ふらうし曠野ハ俳諧やらうりて少しはし大垣の如行荊口ホの門入招て師とし頼む野ざらしの紀行の時より其後奥の細道の時大垣より伊勢迂官

冬は

とてふ別るとして、塔の二見へまゝを行秋ど、又江戸へ
 帰ると、諸門人正風の躰を勤む、又洛へのりて去
 来史邦、元兆ホとまゝめ、初まらば、猿も小猿とやけ
 と吟下り、猿蓑と起と、膳所の曲翠、正秀、珍碩ホと
 引導てひさこの俳諧あり、大と趣き猿蓑ふひやとし
 その後江戸へ帰る、深川芭蕉庵と再びひさふ許六
 此時ふまゝも、珍石江戸へ来て、深川集の俳諧と
 契と、葉うけの挑灯を、朝風、汐、うらる星川の
 橋、愚老が俳諧四五年の後、ハミヤカウあると申
 されたり、支考、桃隣ハ随仕して江戸へ下り、挑隣ハ江
 戸へ止り支考ハ、松島象浮の故ふ趣き、葛の松原も
 撰を野坡、利牛、孤屋と、そのつし、炭俵、出来たり
 又江戸へて保生沾圃と、勤め續猿蓑と手傳して伊
 賀へ帰る、杉風、錢別ハ別座敷と云俳諧あり、下、本朝
 文鑑、芭蕉翁終焉記其云此翁孤獨貧窮まうといへ
 ども、徳の風雅むとある二千余人の門集ありて、夷洛
 ひとふ合信と、因と縁との不可思議いふやと、勤
 破とて、天和の頃あらん、武江の草庵ふ急火の難ふ

かともし、潮ふひと、苦とらるるにて、煙のうらふ生のびるん
 是と玉の緒のよるなまき、え、あやや、爰ふ猶如火宅の
 夢と悟り、應無所住の心を發ちて、其次の年、甲斐の
 山里へ身まぎ、富士の雪のこころ、あやや、三更月
 下入無我とらひん昔の風もまづうらふと、その人々
 嬉して、燒原の旧草ふ庵と結ば、まづいころとて
 むと、便りふと、ひく株の芭蕉と植置て、鹽小兩と聞夜
 くらといその世ふを、此時の吟、まゝ、ハハ、おのつ、ら、芭蕉翁
 とも喚あり、下、此記ハ枯尾花集ふあり、世不流布ハ、此
 ともハ支考と對論あり、再業あり、再業あり、再業あり
 惟然坊手記云翁難波わく芝柏亭ふ一集まき、約諾
 ありしが、數日重食し、あひ、故う、勞りあつて、出席ありし
 奔句の贈らむ、秋深き隣ハ何とまゝ入る、此夜あり
 腹痛の氣味、あて、泄泻四五行、世のつみの、泻あらんと思
 ひて、藥店の胃苓湯と服し、あひ、まき、と、驗し、あて、三十日
 朔日二日と、あひ、つりしが、次第ふ度、數う、あて、終り
 かる愁と、あひ、ふたり、惟然支考内議して、い、あて、良
 醫ありとも招き、半と申され、師曰、我本元虛弱あり
 ころ、あて、醫ふ見せ侍、とて、藥方い、あて、あらん、我性ハ
 冬、は

木節あらして知るものあり、願くハ木節を急ふよびて
見せんとらん去来と一同ふよびよせ談まへことあり有ふ
おむむやくく消息をおろるべしとあり、夫より兩人消
息をたづぬめ、京大津つをつらしむ、然るふ之道が
直下狭くして外ふ間所も多し、多人敷入ること保
養介抱もあままりとて、其所此所と立廻り、我知る
人ありて、御堂前南久太郎町、花屋仁左門といふ者
の裏座敷のかり受たり、間所も敷ありて亭主の物
敷寄ふ奇麗く、諸事の勝手よろし、其夜直ふ御分
抱申て花屋ふらつり多し、此時十月三日、四日重庸
畦止、舍羅何中ホハ師の不例と云らる、之道亭ふ至じ
小病もあふ事と聞えりて、花屋ふあふ、病氣不損ふ
つと尋問の入りたりとも、さうふ坐席ふ通るはじと張紙
と出せ、且仁左門が断ると云、三日廿七行、昼夜、天気
らとる、夜半過、去来きき、二日朝の状三日の朝とく、
其座より直ふち、伏見ふ出し、己の時ありし未
舟ふ乗八軒屋ふ着し、八亥の時ありしとて、直ふ脚
病床ふ参りたりし、師も婦も胸ふせまり、さうしハ

ゆのと宣はざりしが、諸國ふらまるとし人々ハ我と親の
如く思ひあふ、我老れて優きこともあられ、子の如
く思ふ事もあふ、殊更汝ハ骨肉とつけし思ひあふ、
三日見ると、十日のわひせり、さうふ此度か、速き
境より難治の憂ふ懼り、再會あましく思ひ居るじ
ふ逢見ると、嬉しさをて、袂とあわりあふ、去来を
もより落るる、ぬぐひて云、僕世務ふいせまらば、
させる實意もなせらる、御懇意の御意とかり
あふ事、生と隔つとも忘却仕らる、數行の涙あはせ、
何様賣薬の効驗心もあふ、とて、去来又消息とさる
ためて、飛脚便りふ木節ふつらと、**支考手記**云、同三日
の夜子の時、あいつきて、木節来る、二日出の兩人の消息
この夜著せし、ゆゑ、大津と互の時とら、一番舟ふ乗り
しりと、短日故遲著、諸子ふこくふして、直ふ御答
體とさる、ハ脚脈と診せ、至方逆挽湯と調合と、四日
朝、木節申さる、よより、朝鮮人參半兩、道修町伏見
屋より取、同、包香十五袋とる、天気より、之道、
より世話して、洗濯老女と傭ひ、師の脚衣裳との外連

中の衣裳とて、園女より御菓子水仙を贈らる。支考、惟然、介抱、次郎共衛とて、手届、以之、道取計、いと、金雁、吞舟と云り、未、按摩、やうけ、ぬり、今日、三十余度、及、度、毎、裏、急、後、重、次郎共衛手記云、五日朝、又、草、乙、別、正、秀、未、天、氣、曇、寒、冷、甚、し、時候、の、故、也、師、時、々、患、寒、の、氣、あり、次郎共衛、天、滿、ふ、諸、こ、登、ま、ぎ、帰、る、今日、師、食、の、ま、ひ、索、麵、二、箸、一、夜、中、迄、不、五十度、及、ふ、六日、天、氣、陰、暗、き、ま、ら、ば、朝、の、食、乳、面、三、箸、前後、より、か、ら、寝、入、ら、む、を、た、ら、く、睡眠、し、給、ふ、目、覚、より、去、来、と、ち、り、召、し、て、光、の、頃、野、明、方、方、残、し、置、し、大井川、ふ、吟、行、せ、一、句、大堰川、波、ふ、塵、あり、夏、の、月、此、句、あり、景、色、過、さ、し、夏、景、色、い、は、ま、ふ、ふ、思、い、居、ら、し、清、滝、ふ、て、清、滝、波、ふ、り、と、む、枯、松、葉、と、作、り、事、柄、を、變、り、れ、ど、同、案、ま、り、と、人、い、ま、も、つ、ら、あ、れ、ど、大井川、の、白、の、捨、た、ら、ん、と、汝、不、申、し、ら、り、も、つ、ら、小、頃、日、園、女、不、招、り、て、お、き、の、目、お、こ、て、見、る、塵、も、た、り、と、吟、じ、え、是、ま、り、同、案、ふ、似、て、句、の、道、を、ち、同、し、夫、故、前、の、二、句、と、一、句、不、捨、て、白、菊、の、句、と、残、し、置、ん、と、思、ふ、之、

汝、意、い、う、ん、去、来、涙、と、つ、る、名、匠、の、か、く、名、と、惜、し、道、と、重、し、給、ふ、有、と、さ、ら、ぬ、づ、う、句、一、章、ふ、こ、も、し、千、辛、万、苦、し、ら、御、病、惱、の、う、ら、の、御、骨、折、風、雅、の、深、情、を、尊、と、る、を、眼、あ、ら、り、の、何、者、ら、此、句、を、同、案、と、も、つ、ら、恐、ろ、う、の、ら、此、句、を、同、案、同、意、と、も、く、申、さ、も、の、く、無、眼、人、と、申、者、ま、り、その、故、に、此、句、々、景、情、ふ、備、ま、り、て、句、意、と、見、る、時、ハ、三、句、と、の、小、別、も、我、の、句、の、意、と、目、に、見、て、句、の、本、を、見、む、青、苔、日、厚、自、無、塵、是、隱、者、の、高、儀、と、や、め、と、る、語、園、女、い、ま、こ、わ、つ、ら、し、て、陌、上、桑、の、調、あ、る、と、思、ふ、多、ひ、う、る、意、を、妙、に、語、と、妙、に、ふ、ん、世、人、此、句、を、し、る、れ、園、女、清、節、と、ら、ら、ん、也、波、ふ、塵、あり、の、語、ハ、左、太、仲、々、必、非、絲、線、行、山、水、有、清、音、と、い、つ、る、絶、唱、も、お、お、を、を、園、女、二、夫、ふ、ま、ま、こ、え、さ、る、貞、潔、と、大井川、清、滝、の、絶、景、と、二、句、の、間、相、と、の、つ、て、感、じ、て、も、餘、り、つ、ら、と、申、せ、ら、る、師、も、機、嫌、な、く、お、お、し、け、り、法、束、手、記、云、七、日、朝、より、不、相、應、の、暖、氣、ま、り、曇、り、て、雨、ふ、し、藥、方、逆、挽、湯、ふ、加、減、又、乳、麵、と、こ、の、こ、め、へ、園、女、より、見、舞、と、い、つ、る、菓子、亦、贈、り、來、る、鬼、貫、未、こ、去、來、應、對、し、て、還、も、園、女、何、中、溜、川、來、る、去、來、支、考、會、叙、

冬
は

を終ふ葉とめども終日くゆる夜ふ入て暗る人音の
静ありとも燈のりよふ人々伽し居たり乙別正秀
亦去来ふ申したるは今度師より泉下の客とせし居り
給ひ此後の凡雅いふ成行をくらへ去来黙して居り
しが我も其事心ありし故二日の消息なきしや名
斯のこともわたりたり人々も左思ひ多くやとありしが今
宵閑静に只今の体ふも御快復覚東ふし
滅後の俳諧とて奉らんとしておつふ枕上ふりかひよ
けて機嫌とておらひ問申したり翁次郎兵衛ふたそ
まても真草行の三をふらんと其三より千変万化
と我のまご其書とめりとも汝此以後とも地を
とあることあられ地と心は杜子美が老と思ひさい西
上人の道ととて調業平が高儀とつしどらまて
も我ませふありとありひゆめく他ふ化せらるるも
まといひともこれわれども息虫損口うふりとも喘ぎあり
るまは吞舟脚口もくうらむと又葉とまわらせたまら
まらるる人のく筆と執て是と書と惟然手記云

八日天氣快晴御不食あり京の損主表る信徳より消息
とりて御病体と問近江の角上より使来る人々勝手の間
間とて今度の御所労平復と祈奉らんとて住吉大明神
小連中より人と立べと去来申しりまはわりのくまら
べし之道次郎兵衛闖はらて社務林采女方お祝詞
とよみ厚く神納の品々贈らふ奉納峰も鴨のさ
ふりや諸きわひ文章木うらしの空見あむと雀の声
去来起るる声ゆるるる湯婆うね支考(引)うらふ
竹のこややととての惟然此外連中の大勢の集會ふ
りたるは悦い真しと師とありまらるる木節去来小申
々るは今朝御脈をうらひ見申さふ次第小氣力もた
るへのふととて脈体もらし最初小食滞よりせりし
泄浮ふとも根元脾腎の虚とて大虚の痢疾あり故小
逆挽湯主方あり尚又加減して心を尽もとつて薬
力とらるる願くは治法と他醫ふりめんと思ふ去来師ふ
申師の曰木節の申条むもむらある仙方ありく
虎口竜鱗と醫ととて天業つぐせん吾うく悟道した
とハ我呼吸のうらも人間はいつまども木節が神方と服

冬は

せん他ふむとせむ心ちりのこまひらふ支考、乙州ホ去
来ふ何うくゆききバ去来心得て病床の機嫌とろひ
て申して云、古来より鴻名の宗匠はく、大期ハ辞せあり、
さむうりの名匠の辞せハありしやと、世ふのふりのあり
べし、おどき一句を残りしらる、諸門人の望、豆ぬへ、師曰
昨日の登句ハ々々の辞せ、々の登句ハ明日の辞せ、吾生涯
ハハ捨し句々、句々として辞せ、わらう、いあ、ハ、ハ、我辞世
いうせとふふあ、ハ、此年ごうのハ捨なをし、句、づれ、あ、とも
辞せありと申給はらう、諸法従来常示寂滅相、ハ
ハ是叙尊の辞せうして、一代の佛教此二句より外、ハ、
古池や蛙飛こむ水の音、此句ハ我一凡を與き、うり、
めて辞せ、其後百千の句と吐ふ、此意ふら、づら、ちや、
ら、を、以、て、句、々、辞、せ、ふ、ら、ら、ハ、あ、と、申、ハ、次、郎、兵、衛、が、側
より、口、を、潤、ま、ふ、ち、ご、う、ハ、息、の、う、ぎ、う、諾、ら、う、
支考手記
八日夜ハ入て嵯峨の野明為右より櫛を贈り来る消
息、ふ、今、日、まで、伊、賀、より、音、信、あり、去、来、乙、州、申、談、し
ら、ご、と、飛、脚、を、立、て、下、り、師、ハ、申、ふ、れ、ハ、師、の、曰、我、隠、遁
の、身、として、虚、弱、ある、身、の、數、百、里、の、飛、杖、の、ハ、立、親、族

より、と、め、ら、れ、し、と、あ、ら、う、の、ゆ、く、せ、し、ハ、我、過、あり、今、大
病、し、申、ゆ、り、あり、一、類、中、の、ま、ま、ま、殊、ハ、主、公、の、聞、し、め、し
も、お、と、ま、あり、ま、ま、ハ、此、度、大、切、及、た、と、沙、汰、有、ま、う、と、
宣、ひ、ら、り、師、の、慮、あ、ら、ご、と、な、の、く、感、心、も、度、敷、上、六、度、ハ
及、ぶ、惟然手記云、九日諸子の取らうらハ、と、古、き、衣、裳、
又、夜、具、事、の、垢、つ、ま、も、不、浄、ある、を、脱、し、よ、き、衣、の、せ、
ら、ま、わ、ら、も、師、曰、遠、地、波、濤、の、ほ、ら、う、草、を、數、塊、枕
として、終、と、取、つ、ま、身、の、か、る、美、々、と、禪の上、ハ、ま、ご、と、
未、来、よ、の、友、と、ち、あ、ま、ご、く、し、と、ま、ご、ハ、鬼、録、ハ、上、う、
受、生、の、本、望、あり、昨、夜、目、の、あ、ま、ご、ま、ご、不、斗、案、し、入、く、
吞、舟、ハ、せ、く、り、の、の、く、詠、し、め、旅、あ、や、ら、く、夢、を、枯
野、と、う、け、廻、る、枯、野、と、め、く、夢、ご、ら、と、も、一、待、ら、づ、れ
あ、ら、ご、ら、ま、ご、の、れ、辞、せ、ハ、あ、ら、ご、辞、せ、ハ、あ、ら、ご、あ、ら、ご、
ら、ご、病、中、の、吟、ふ、り、ま、ご、ら、か、る、生、死、の、大、事、を、前、置
あ、ら、ご、い、う、小、生、涯、ご、の、一、風、流、と、い、ハ、あ、ら、ご、ら、ご、と、ま
枕、の、一、と、の、ら、ご、去、来、の、ハ、左、ハ、あ、ら、ご、日、々、朝、雲、暮、雨、
の、間、も、置、き、山、水、野、鳥、の、声、も、捨、る、に、ま、ご、心、身、凡、雅、な、ら
ざ、ら、う、く、河、魚、の、患、ふ、つ、ま、ご、の、ハ、ま、ご、ら、ご、ま、ご、の、く、ま、ご、
冬、は

其風神の名章とて多しと諸門葉の悦び他門の聞
 え未代の龜鑑ありと涙きり涙とて眼あもめの
 身に見ば魂を飛せん耳あもめのことと聞ば毛髪これ
 為やうと人列座の面々感慨悲想して慟絶し声なし
 こと師翁一代の遺教経に此日より殊更におつらなり
 度敷まじきこと云未手記云十日初時雨其師夜の明
 かり度敷まじきこと一入あもつら折節よ諸言あり
 取あもつらことぬをし木節此日芍薬湯とりも諸子うち
 より食事まじきあもつらせんまじきことあもつら梨実と
 のぞしあもつら木節まじきことあもつら小笠まじき
 故止まじきことあもつらまじきことあもつら脾胃
 くる所あり死期ちるまじきことあもつら申の下刺お至
 人心地付まじき今日ハ少も食しるまじきこと云未手記
 十一日朝まじき時雨を思ひけちく東武の其角未
 是ハ東武のまじきこと同伴よと叅宮の序和州紀伊打
 めらり泉州より浪華お打入らまじきことあもつらまじき
 聞つけまじきことあもつら漸くあもつらけつまじきこと直病
 床お参て皮骨連きまじきことあもつら体と見まわらせく且

愁ひ且悦ぶ師も見やりらるまでや唯々涙とてあも
 其角とことあもつらあもつら居たりしこと大草去
 来支考其谷の衆次の間お招きまじき御病体の始終と物語
 る此夜あもつらあもつら加して思ひありしことあもつら
 居たりしあもつら時頃よりして師夢の覚る如く粥
 と望まじきことあもつらあもつらあもつら次郎兵衛とつて
 まじきことあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 めて快く召まじきことあもつら朔日以来の食事へ土鍋お残
 たるまじきことあもつらあもつらあもつら病中のあもつら
 やまじきことあもつら去来云趣向と他あもつらあもつら
 事を口まじきことあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 らまじきことあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 一の蒲團お引りまじきことあもつらあもつらあもつらあもつら
 あもつらあもつらあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 そ其事をまじきことあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 わらひりぬ惟然あもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 一座是と聞てのまじきことあもつらあもつらあもつらあもつら
 とまじきことあもつらあもつらあもつらあもつらあもつらあもつら
 冬は

冬は

おむく日向ふむらぐり居るふ人々織りて蠲さす
 とらふ上手下手あまを見もひてまづらく真ふ入ふけ
 せど大病中のごとあれハ忽ち倦み多ひて且小寝所ふ入
 るハ支考ハ師の護句と滅後ハ一集せん心願あれど此
 ららの病苦ふあやとあふ見合せ居りしふらハ機嫌
 よきふ乗じて申出侍りと申しとくたふハ去来よて
 師の心中を知りし故ハ大に怒りこころきこと申
 むのハ師ハ平生名聞りき事こめと給ひど今日漸
 く快き体を見うけまづりて諸人られしと思ふ中ハ御
 氣ふさうふとを聞せ申て々御心を安しめ申さると
 奇怪ありこの後御床ちつくよハあふ早く其座を
 立ちてし声あらくハ次の間ふ追立ちたり支考もさう
 りのひみ出して諸子の聞前面目とさういふハハ徒々
 惟然ふ打むらひ我ふ句ありと書きていひてあつら
 まて次の間あつら寒うぬ支考「さすハ支考ありなれハ
 師もあのみきあひてさうかりあひたり「闇とて菜飯
 たらまる夜伽ぬ木節「さふ子あり葦虫寒く鳴る
 まこ別「うつくまる葉のりとの寒うぬ支草「吹井より

窟とあゆえをもとを其通一々惟然吟声「たれど師
 支草が句を今一度と望とあひて支草出来ささうのつ
 きさてもさひまをうとさうのひさり面白しとまじがさう
 声りてほめあひたりいふさうさうし師の機嫌のうさし
 きと悦びらるふ木節一人愁をいどらる体もささるれハ
 其角その故と問木節云病ハ除中の症とらつてあつ病
 中絶食ありハ俄ハ食のまじつてあつハ損症ハ死期遠き
 ふわらふとものりさハあさるむくさあさ居らるふ
 夜半さうより又寒熱往來ありて夜明さうより顔色
 土の如くとさあひまづりハ悶乱し人もさうりさまを
 さうしが良ありて又實忘ふさうりあひ左右ふ舎羅吞
 舟らしるより次師兵衛抱きまのらせて介抱ししほど
 あり夜明さるハ十二日ありかひてハ閉こりともはるが
 屋の障子もあまをさ取さるさせ去来其角支草
 ことさうしと招きさるハ穢ささうり思入さうらと
 こわり行水とのぞきさるハ木節ささうりお制し申さる
 ともさうりお望さうらあま止ささる湯とまわらせり
 座をさうりあわらさるハ木節の醫術と及されしとさる

冬は

あどつらくお謝しむひさて三人の衆とちやく召れび
 州正秀と左右より支考惟然お筆とらせお跡のこと
 こまかく遺言おひんしり病苦さへしりもええあつじん々
 奇異の思ひとあつらん伊買の遺書ハ手づつら認め
 むの京江戸美濃尾張おもつらん遺言しりあはた
 門人筆記も次第お声らるる痰喘たんぜん申おんんんんハ次
 郎兵衛湯あて口をうらわしまわらせらん良ありく
 去来おひらひ先ころ實永阿闍梨より路通の事
 仰ありその後汝が文章乙州ホ贈りし消息露霜とハ
 捨置すても併ひらしりうくともりて雲井のよふふし侍
 うもつ数年の薪水の労ゆめく置おぞ我あそ跡
 あいよそよ見捨とめつ風交しめくつたの侍諸
 國にお傳へらるるしり終まひて餘言あまのこは合掌
 正しく觀音經に聞えてくそく息のかよひも遠く
 申の中刻もきて埋火のゆめまうらひひらか如く汝取兵衛
 が抱きまわらせらんふりうりうりく死顔うりうりく眠
 れるも期まして物うつけたり時小元禄七年戌年十月
 十二日御歳五十一也即刻不浄ときも白木の長櫃あひらう

収めまわらせくの夜直お川舟おて伏見を御供し奉ふ
 其人々ハ其角去来大草乙州正秀お弟惟然支考之
 道吞舟次郎兵衛以上十一人花屋仁右門が京一荷物と
 送る体お長櫃の前後と取まき念仏誦經をお供
 養し奉るハ幡と過るころ夜もあつて明もあつてふ
 僧李由の下もあつて舟お行おひらきおとて来うり
 相とかならせり物らしてちやちや京橋お着大より
 狼谷通りおかりつておとておとておとておとておとて
 天津乙州お宅お入奉り御沐浴ハ之道吞舟次郎兵衛
 御髪お伸させおとて月代ハ文章法師おとせり御
 法衣淨衣ハ智月と乙州ハ妻縫奉る淨衣白衣にて召
 させまわらせりおとておとておとておとておとておとて
 茶色あはれのあはて淨衣も茶色の服おせられらるるて葬式ハ十四日
 ありて然馬記あはれ云湖南の義仲寺お棺と移して近里遠
 境の名を傳へ人ハおとておとておとておとておとておとて
 ありて墓ハ本曾殿おとておとておとて古ひら柳も
 あれらるる終馬のちらるるておとて野面の無縫

冬
は

赤と帯其背腹斑の文あり初毛ハ四月
と易て後略鷹と同じ全体鷹鷄似

鉢叩 くの部空也忌
の条注を、**袴着** かの部髪置
の条注を、**初鯽**

六月五六寸津波瀬とつゝ夏のつ部の部つものホラ
和漢三才圖會 仲冬長じて三四尺最大者もの
五六尺鯽と名づく、暗くして冬春と食ふ脂多く

味厚丹後と上と、此小きより老小至る時名と改む
初江海あり、徐大洋不出る東北の海より連行
て西海對州終る出世昇進の物とこれと大魚と極

貴賤相饋つて
歳末の喜祝を、**初深雪** ころも積
十二月獺

の枕 獺の札 説文 獺、熊に似て黄白色力多
く鐵と甜て千斤と消と其皮
温暖あり **故事要言** 節分小獺と云獸の形と画て枕

小敷を悪夢と見どと俗にもつゝ俗に小獺を
夢と食ふ畜 **早咲の梅椿** 梅椿の両種特小
ありとり、**早咲** 早く咲出り

あり泉州堺の浦の人十月梅椿と京師小贈
る、茶人特小とと荷ひて茶寮の觀とせ、**晩歲**

月会廣義 蜀の風俗晩歲
相鯁問、こまを鯁歲といふ **春の隣** 隣歲の暮あり

但し晦日不限らざるの **古今俳諧哥** 冬あから
そとの隣の近々色中垣より花もちろ深養
春と

急ぐ春と待春近き 歳の暮の深養
とあてしむべし

兼三冬物 鳩 **大和本草** 鳩、字彙曰
好で水入て食ふ鳥也

て小又本草小載く、**鴝** もつゝつりあふし、**鴝**
順和名抄は二ホと訓ス、俗に鳩の字と用ふ、**鴝** と

一物二名、**本草** 小鴝、**鴝** 大と鳩の如くつて、**鴝**
陸行てあつても常小水中に在て入至まじし、**沈** 眞享

式 鳩ハ鳴声も寒気あり、俗語あつたりともいふ、**俳諧**
俳諧は名目の自在と称して冬小用わつて用ふと

あつて、**鳩** の巢ハ夏 **煮凍** 煮くもの、**胡蘿蔔**
之夏の部ととし、**冬** は に は

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より
来る気味蘿蔔不似く故に名づく
十月新

嘗祭 あめまつり 中夕なかつゆ 公事根源 今年の初詣と神事奉ら
せりあり御代の始りあり大嘗会と
いふ年毎のまじし新嘗会といふ下食の入々 **庭燎** あそび 加
指衣日陰と書き用明天皇二年四月より始む

部神樂の **錦の帽子** なまき ぶし 部の鷹の葉 **新玉津** あひまづつ
糸よ注ぎ

島火焼 しまのひやく 十三日俊成卿勸請し五糸の南鳥丸の西玉
津島町あり **紀事** 昨今冷泉家
多く参詣し或は法衆の和音あり九この門前一町と
とこもく此社の氏子あり今日市人神前の御酒と
冷泉家不献る時 **雞乳** けいじゆ の部鶴始集と
ハ酒食と賜をも くんとつる糸よ出

十月法勝寺大乘會 じゆつ ぽうしょうじ だいじやうかい 廿日より○當寺ハ
の皇居ありその後天台宗の住持聖道衣あり後
醍醐帝の勅ありて律衣とあり今寺絶て岡崎

村の數中小諸堂の跡残る九重の塔の跡村の南ふ所
に塔壇と号し糸櫻の名所あり風雅集淨妙寺関白
よりして過ぬるありて糸さくら心あつる春の木の糸
一説不當寺ハ南禅寺の西北新黒谷の南あり古の地
ハ白川の大正忠仁公の別業ありて寺ハ白川院の御願
あり當寺の九重の塔浪速の浦ありてあり

蕪三冬物 うるさんとうぶつ 掘出ししものあり關東まで
根骨とり山家女冬このころゆふ昼夜こまこと焼く
寒と凌ぐものあり **糸切菌** いとぎりきん 不滑ハ昼夜おくものあり
らむ灰とみし埋火と **干菜鉤** かんさいこう 干菜とわりの
夜明る迄寒と防く用と **蕪菁の葉** うるせいのは 煮て
採て簀下ふけ陰ふ **十月報因講** じゆつ ほういんこう 御仙事
乾と喚て懸菜と号 くわんとわんでけんさいと号 御講

廿二日より廿八日まで○親鸞上人の忌日あり上人ハ
内丸の後胤藤原の右範の男伯父範綱養ひて子
とも字ハ善信坊名ハ緯空又範宴と更り初め慈鎮
と師とも後源空の才子とも弘長二年十月廿八日

冬 ぼへと

寂也年九十一淨土真宗の開祖より東西本願寺十月廿二日より廿八日まで報恩講と修き京江戸在家宗門の徒衆諸群集を或ハ御霜月と称す又御講のハ昨今時として天氣快晴人俗ふること御講田といふ

十二月 星佛賣

十三日 紀事 此月十三日大佛師 去年の属星の形と彫く

禁裡ふ献む民間の亦この事と云ふ故に人家各星佛と買て帰依の僧と請きこころいと祭ふ故に市中星と賣者あり所謂日曜月曜水曜水曜火曜曜曜計都の像あり



冬瓜

時珍曰冬瓜其冬熟を以てなり貞享式此名ハ俳諧の自在なり冬瓜と音ふり或は瓜と訓ふる中古今総て秋季とせりさしと幸ふ冬の一字より霜を待て賞むる物なり西瓜と秋とせり加減より東福寺開山忌 聖冬瓜と冬と定むるあり忌と云ふ部不注と

兼三冬物鳥叫鳥立を慕

たの部鷹 海鼠

鼠の条注

十一月冬至

朔旦冬至 月令廣義 大雪の後十五日斗子小指と一陽の嘉節 冬至と十一月の中陰極て陽始て至る日南不至漸く長く至る 玉燭宝典 十二月子建す周の正月冬至日南小極て景極て長し陰陽日月万物の始々律黄鐘不當其管最も長し故に復長の賀あり 朔旦冬至 李吟云十一月朔日冬至ふありあり 廿年一度まゐるとしてめでたき瑞祥あり 其日ハ天子南殿より出御ありて旬と行をせむハ公卿賀表と奉るとあり 一陽の嘉節 李吟云十月八無陽の月冬至一陽來復なり 孝經の説冬至至三義ありハ陰極るの至て二陽氣を以て 童女 至る三六日南不行くの至る故に冬至といふ

御覽

この部五節

豊明節會

小巳心衣日蔭蔓 日蔭赤心菓

江次第 新嘗会裏書云毎年十一月中の辰の日行之 豊の明の節會是天子新穀と嘗む故に新嘗会

冬と

とつ云云 **公事根源** 今年の箱と神奉らせりて
 今日君もきこし、臣もたまふ故ふ節会行ふ
 新嘗の祭とて、上卿宰相、辨、小忌衣と著る、余人
 諸司の小忌と束帯のふ著る、入る、青
 摺と用ふ、上卿宰相辨の上首と勤じ、南殿の箱ふ元
 子とまうけ、内辨已下座あつく、白き酒黒き酒の盃と
 とり、大司の別當よりわけて舞姫のかり、五度袖と
 久して入事、堪る、上達部五節所とわけて
 催馬祭とて、節会の儀常のことし、下畧、小忌衣
 奇服、小忌の青摺、小忌の袖、山藍の袖、或記云、小忌の支竹
 桐夏、望も冬、望も、舞人と奉る時、拜領すとて、
 年少の人、私ふことと調へ、着用とて、大嘗会豊
 の明の節会、用ふ、件の節会、小忌の袍と着用と、其時
 關袴の如し、但身一幅、狩衣の寸法と用ふ、又白き袍と
 粉張りて藍ととり、後、望も、裏あ、只一重、又小草
 柳、水草、蕨、蝶、小鳥、ホ、山藍の葉、く、摺、又諸司、小忌と
 つ、わり、連曆の度、麻布、鹿鹿のの、**和訓栞**、小忌、
 畧と、大忌、小對と、此、大小、鹿、細との、**和訓栞**、小忌、
 畧と、大忌、小對と、此、大小、鹿、細との、**和訓栞**、小忌、
 畧と、大忌、小對と、此、大小、鹿、細との、**和訓栞**、小忌、

の糸 **和訓栞** 延喜式、日蔭の蔓とて、古事記
 天の日影との、神代表、以、蘿、為、手、綴、とつ、松、羅
 一名、女、羅、是、こと、く、別、種、あ、べ、今、狐、の、と、せ、
 物、是、新、拾、遺、玉、ひ、う、け、も、あ、み、大、嘗、会、用、ひ
 せ、ら、る、式、ゆ、く、出、り、今、白、糸、青、糸、を、
 組、冠、の、左、右、垂、せ、ら、る、其、表、物、と、の、り、日
 う、け、の、組、ひ、う、け、の、糸、も、と、て、盤、戸、小、神、の、と、
 ら、せ、る、時、あ、ま、日、影、と、出、入、と、言、書、て、た、を
 き、よ、ま、ま、の、へ、の、り、**和訓栞**、大、嘗、会
 小、冠、の、上、懸、る、もの、祭、主、と、賢、木、の、枝、と、せ、り、
 神、代、の、卷、ふ、その、首、と、て、り、桃、花、葉、葉、心、葉、ハ、金
 銅、の、梅、花、と、と、之、萬、葉、集、大、嘗、会、の、さ、か、も、さ、か、ん、
 今、主、上、八、櫻、の、柿、頭、て、造、る、大、臣、ハ、藤、大、
 中、納、言、ハ、山、吹、赤、議、ハ、梅、心、や、り、小、減、金、と、用、
東三
條の御神樂 かの部神樂
採物歌 かの部神
道祖神祭 十六日、栴、豆、天王、寺、領、天王、寺、村、小
 あり、祭、る、所、栴、田、彦、命、あり

冬、と

この日一村の童のつまり、往来の人ふ錢と乞ひて祭礼の料とを、錢とわらへるるを、戯れ小繩と以て往来と遮り留むよりして、このこととちるもの、商買といふも、今日此處と通らざる、但壞の魚荷飛脚ハ、故ありて、道路まづらひ、酉の日、伊豆國賀茂郡、鶏の、三島の駅あり、

町詣 酉の日、鶏大明神の社ハ武州葛飾郡花又村、酒の日、三ツあれば三日とあり、市より上の酉の日と専ら、江戸近在より諸人群集して甚ど賑わり、是當社神事の遺意ハ、土産ふ芋くらと賣之、参詣の人必これと買ひて家ふ帰る、又此日浅草寺の裏手、鶏大明神も此市、**冬至梅**、和漢三才圖會、單葉の冬ありて群集、

ひしく八重み、**十二月 立土牛童子像**、花浅紅の者あり、**公事根源**、大寒の日夜半、小陰陽師土牛童子の像と門口より、青黄赤白黒の土牛と、門々小春夏秋

冬の色不随ひて、さるる慶雲二年天下疫癘、さるりあつて百姓みちり失う、さるる土牛と作て追儼とつらとち、さるる異國の書ハ、農事のさるる時と示さん、土牛と立ち、さるる、**延喜式**、土偶人十二枚、高サ各、さるる、**豆腐蒟蒻と氷**、製法本、土牛十二頭、**朝食鑑**、

意、**年木推**、春用つる所の薪と、年内、**樵置**、是、命、**四監叔秩薪柴**、又云孟春之月、**禁止伐木**、注、以盛徳在木也、然、**孟春**、木を伐らぬ、ゆゑ、年の内、**春の薪**を伐ること、**擬**あること、**天木**、高島の松山川の、**笈士**ハ、さるる、**年木**と積らるる、**年**の市、**来春用**する物を悉く賣るあり、**五元集**、**年**の市、**れ**をよぐ、**羽織**、其角、**年の終の魂祭**、秋のこの部魂、**年内立春**、祭の条、**出**、

冬、

冬、

古今 年のうち春八来ありりとせむ去生とやいん

部より代々の撰集多々ハ巻頭入ル

らふ連哥ハ冬ニ俳諧又冬ニ用テ

の暮 芭蕉 年の終

在原元方 年浪あがら

水ハ道助親王 歳の末

領子内親王 年の湊

の各残、年の冬、年の果、年みみ

如 年籠 滑稽雑談 和俗大晦日の夜 冥仏冥社

諸て年と云ふは、是と年籠と称す、諸

國ハあると云ふ、其国郡の神社佛閣ありて、

京都にてハ伊勢熊野と近くハ祇園清水愛宕

ハ幡と云ふものあり、猿蓑と云ふ

のくくのものあり、伊勢熊野去来

茶の花 陸羽茶経 其樹瓜盧の如く、葉ハ危子の

し、注云瓜盧木ハ廣州小出ツ茶ハ似て

至て苦く、洗ハ檉桐ハ蒲葵の属ハ云

カ草 力の部鷹狩 千鳥 村千鳥 浦千鳥 磯

鳥島千鳥 濱 和漢三才圖會 鶴 千鳥俗 萬葉

千鳥 小夜千鳥 集乳鳥と云ふ又智鳥 江海邊ハ

在て百千群と云ふ、千鳥と称す、鷗ハ類シ、鶴

不似て大ニ其頭蒼黒、頬白く、眼の後ハ黒き條あり

背蒼黒く、翅黒く、腹白し、胸黒く、嘴もまご蒼黒

尾短く、脛黄蒼ありて、細く長し、冬月最の多く

水上ハ飛鳴き、侶と云ふハ九鶴の種類

甚と云ふハ、四十八品ありと云ふ

本草 雀より大ニ前三指後指あり、歩むハ足と左右

イ、ちちと云ふハ、人の歩むことと云ふ、似ると千鳥足

冬 ちりぬる

十月

兼文物

十月 智惠粥 たの部大師 講の条不出 十二月 著

欽政 公事根源 五月ふ同じし是檢非違使在京 少く制法を行ふこと 延喜式 凡罪人者隨罪

輕重者欽若盤加 頸ふ在と 鉗こひ足ふ在と欽と云刑具あり 十月立

冬之節 麥問注 立冬節 初五日水初て水次の 五日地始て水る後五日雉大水ふ入て蜃

ぬ 兼三冬物 偷立鳥 ぬきさう鳥

暖鳥 たの部鷹狩の条不出 十月

御影供 御命講 御會式 五日 日蓮上人の忌日 春の弘 法大師と心と御影供とのふ

上人の房洲の人三國氏弘安五年十月十三日寂を年六

十一後醍醐天皇勅して大菩薩の号を贈らる蓋洛

比妙頭寺の妙実兩と祈るの賞ふ因てありと云武

州千束郷池上村長栄山本門寺と終焉の地と昨今

宗門の徒佛壇を掃除し紙あて製しと造り化と

うふ酒五 御取越 一向宗門の徒此月親書上人の 忌と修も忌日八十一月あり故ふ

御取越 神集 土日あり 和漢三才圖會 大社神事

神の宮ハ出雲國杵築村あり大己貴尊を祀る天

皇三十二年垂跡昔ハ宝殿高と三十丈今減して八

丈後深草院室治元年八月廿五日建立三条院應

保元年始て三月会行ふ○毎年神祭七十二夜中

十月ハ殊小深秘の祭といふ十月十一日より十七日迄

と齋と称も二の間風烈しく波のきき日一蛇化度

藻ふ乘として海濱ふ浮び人らととこれとて色一國造

へ訴ふとの入ふ褒美ありとの龍蛇と曲物ふ盛つとく

神殿ふ納とらんとの蛇の形瓊蛇ふ似て鏡形の斑又

連ふ又五色の彩色重なるが如し尾先ハ魚尾ふ似て

冬

岐^とあ^く屈^つ曲^くして宇賀神の^とこし尾越の鴨^も 貞享式
此名を

おとし神祭第一の物とを
俗習く鴨、往來の道と定めて山の尾越より越る故
とを然れむ初鴨と秋とを鴨とをうりて冬とをせと

名ハ殊小俳諧 **兼三冬物** 山城国小野
の用と云へし、 の里より出

ると **温石** 大和本草 山東通志云掖縣より出ッ色
青白と兼ぬ潤膩玉の如し味甘く毒ふ

し、薬物不備ふへし、日本は温石といふ物あり、色白じて
少く青しやうあり、是山東通志ふまうせ、温石と同

物あり、 **落葉** この部木の葉 **追鳥狩** を
の条小併せ注を

し、草、落草、呼声 各たの部鷹 **鴛鴦**
の条注を

鴛鴦 との劍羽 和漢三才圖會 其羽毛五彩なり頭
の思羽 小玄纒あり、頸小紅糸あり、背小

き羽あり、摺扇の半邊のとし、俗小劍羽と称と九月
多く至る家々庭池に養ふ然も鳧鴨と同居と鴨

ハ蒼色なりて目の後小白き條あり、翅尾黒く腹黄ふ
赤黒の紋あり、**大和本草** 鳩雄相愛して相離まへ他

鳥小異あり、東垣曰二其一と失へ朝々思ひ慕ひ憔悴
して死を昔獵夫らと以て其雄の首と射切る其翌

年又其水辺を通る時雌一隻あると射殺してさう翅
の内小去手射つし雄の首ととり、**新撰六帖** 池

まむと一のつらき羽をさしてつらまらうこの **鴛鴦**
けしとまむと一の思羽の證哥との衾の条とぬ

け杓 鴛鴦の姿の水小似たりこりふり古哥この
池つらぬと一のつらひ誰か杓のつらまらうと

玉海集 どの杓や張良 **鴛鴦の衾** 西京雜記
あふとまむと一の友直 趙后燕皇

后より其女弟昭陽殿あり、飛燕不遺る書云、鴛鴦
の襦鴛鴦の被鴛鴦の褥云 **土二集** 霜りぬこの

衾のぬのこくと千世をうらむる病の池水〇鴛鴦と
縫ものや、或は匣とさるとこの衾をも襦ともりふあり、

十月大原祭 中の子日 一年小西度あり、
春のこの部注を **小忌**

冬

衣ころも どの部豊のかみ かの部神遊か 御火焼かき
明あきらの条あきら注あきら 大前張おほまへぢやう 哥うたの条うた出いッ

庭火の遺い凡ふ允ん此月諸社こ於こてこと修しゆと○朔日
智恩寺鎮守賀茂明神○四日上出雲路幸の神○八
日所々の稻荷いといハ先朔日い稻荷の氏子の兒童い小こき
神典と造つて朔日より市中と振ふて人家いよ入いて米錢いを
ここひこをこ以いて八日の火焼料い宛あて日の新御供いハ社
家松本氏調進いといふ同日安居院有い極く川の宮い並大
坂高津の宮い王造い稻荷天王寺庚申い○九日貴船
結神い○十日太田の社い五条天神い○十一日粟田口神明い○
十二日生玉い十三日三津八幡い○十五日所々八幡宮い并今
宮所々神明吉田岡寄天王並坐いの社い○十八日上下
の御い○廿三日貴船い○廿五日北野いとの外神社い毎い
この月會日いは柴いと神い又い小積い神酒いを供いしていて
のち火いと投いしていれと燎いと兒童い
口々いふ某いの神いの御火焼いと拍いと 帶解おびとぎ
注い 報恩講いといふかの部い注いも世俗いぬ
御佛事ごぶつじ ついといりい増山の井いふいといり

御祭みまつり 日の使掛鳥ひのつかけとり 春日若宮の祭いあり本社を
後日の能い 廿七日 去いるい一町いをいり平林の

中い不いあり法要集い若宮御殿い天押雲命い云い然いとも
若宮社家秘記いとい紀事い南都若宮の祭い夜宮い共
奥福寺の僧頭屋田い衆いあり元頭の僧一人兩頭と
りいふいとい兩人の義いをい兼いりあり長谷川黨い春日の社い
衆詣野太刀を携いへ馬いと牽いといと遍照院の渡い
りい御旅所の前いふい於いて流鑄馬いあり夜亥の刻いをいり
ふ若宮の神殿い小神幸いあり神樂い訖いて後燈い燈いを
消いし社家各神い体いと擁護いといとして闇中い衆所い小い進い
し奉いるいといふ於いて燈火いと張いて音楽相撲い小次弟い小
ついとい修いとい當日廿七日いいいかいへ式日いあり寛正年中
ちいしを定いむ巫女い及いし伶人田衆申い衆いあり供奉いの僧
奉行職人松の下鳥居いの南の方い於いていといとい
衆人上越後守騎馬いとい供奉いとい是いとい関白代いとい
又い倍侍衆いあり田衆藝術いとい施いし衆衆開闔いとい
らいといとい松下開闔いとい允い衆衆の始い服大夫い新い吉
事の詞いと作いとい万歳いと祝いといといと開闔の詞いと云

冬と

その後舞曲あり、また金春金剛の両座大夫供奉の時、社の立合と舞ふ、觀世保生兩座の大夫供奉の時、弓矢の立合と舞ふ、大小の鼓と以て、相と殿、後、大和國と領と、の武家、各鞍置馬、長柄の鎗を、出し、奉供の行列あり、夜ふ入て旅所より、還幸、相神幸の義、同じ、○日の使と、関白殿下より奉らる、騎馬、伶人は、黒袍冠の中子、小藤の造、花と、の祭、八人皇七十五代、崇徳院御宇、天下大、饑饉、三年、又大、疫癘あり、関白法性寺、忠通公、この祭礼の、大願と、登し、ば、天下、静まらりて、毎年、行、と、保延二年、丙辰、九月二十七日、これ、この祭の、も、
 ○掛鳥と、春、日祭のとき、鳥獸と、以て、
 ○と、掛鳥と、雉、千二百五十六羽、兎、百三十四、狸、百四十二匹、是、又、保延二年、より、春、日、先、規、より、
 地、平田、長川、長谷川、葛上、乾、
 奈良、良の、大、宿所、あり、掛鳥の、事、と、
 日の、能、と、春、日祭の、翌、廿八日、能、藝、と、
 ま、前、日、旅所の前、より、流、鑄、馬、伶人の、舞、相、撲、細

男舞田樂ありて又翌廿八日
 後樂あり、故、後、日の、能、と、
 十二月 弟兒の朔日

乙兒の餅 一年中の朔日の終あり、俗、乙子の朔日と、つ、和の、諺、と、
 とも、又、初の子と、太郎子と、称、を、故、歳の、初、の、月、と、太郎月と、つ、歳の、末、の、月、と、乙子の、月、と、つ、故、乙子の、朔日と、つ、又、此、日、餅、と、つ、と、
 俗、と、川、浸、餅、と、つ、俗、傳、と、つ、食、へ、水、難、と、

大神祭 上卯、此、祭、一、年、一、兩、度、あり、
 御佛名 夏、の、の、部、に、注、を、

被綿 十九日、
 柏梨の勸盃 廿一日、
 仁寿殿の御本尊と、つ、して、御帳の中、入、け、て、南の額の間、又、南北、小、机、と、つ、
 香華と、備、小、箱、に、地、獄、変、相、の、御、屏、風、と、つ、
 御、仏、名、の、時、導師、並、小、衆、僧、に、被、け、賜、り、の、綿、と、つ、
 江、次、弟、ふ、と、つ、
 柏梨の勸盃、ハ、む、
 江、次、弟、
 裏、書、云、
 某、攝、津、國、柏

冬

ハ分明あらざり或ハ真綿まわた木綿きわたもきく冬ありと
 綿わたハ綿わた枝えだの對たい多おほきハ入い字じと添そてハ冬と定さだむる
 綿わた打うちと秋あきとあ綿わたとあ摘とりハ棉わたとハ打うちとあ打うち
 ハ木綿きわたやあ決きつハ冬と定さだむる
 綿わた帽子ぼうし 京都きょうとの
 新綿しんわた棉取わたとりの外ほかハ秋あきとあ綿わたとあ被おて用もちて其面そのおもてと蔽おほふあ及およぶあ輩とも夏なつハ羅らの帽ぼうし
 子こと用もちて其面そのおもてと蔽おほふあ唯ただ青樓せいろう伎婦ぎふの輩ともと
 面おもてと蔽おほふあ故ゆハ京師きやうしの人ひと 綿衣わたぎ 綿わたと以もて常つねの
 衣ぎの如ごとしあこれ
 と製つくり所ところ々ごとくあ絹きぬとあ老おと
 者寒さむと禦ごぐの服ふくと長短ながた心こに従したがふ 輪炭りんたん 其炭そのたんの
 薄うすくあこれと切きつハ状車じやうぐるまの輪りん
 此ことあこれと輪炭りんたんとあ
 の人ひと十二月じふにがつ小この月つきらんあ正月しょうげつ日ひ
 と以もて晦日みづかひとあ故ゆハ私木しきとあ
 送おく 神かみの留守るす 神かみの旅たび 神迎かみむかひ
 此月このつき 諸神しよかみ

加十月神

十二月私大 奥州 南郡

輪炭 其炭の大

綿衣 綿と以て常の衣の如し

綿帽子 京都の婦人專

出雲國大社いづもくにのほくら小集こあひまとあハ男女おとこの縁ゆかりと結むすぶあと
 迎水口むかひみづぐちとあ 神集かみあひま 神在かみあ 事ことの部べ大社ほくら神かみ
 馬うまの鈴すず珍碩ちんせき 川音かみねとあこれあ 寒菊さむぎく 天和本草あまのほんそう 冬ふゆの部べ 寒梅さむばい 梅うめの条じょうハ注しゆを
 音ねの時雨ときあめ 聞きとあこれあ 寒菊さむぎく 菊きくとあ寒菊さむぎくと
 瓜うり 冬瓜ふゆうりとあの 枯尾花かびな 貞享式ていかうしき 此名このなハ古今ここん今いまふ
 部べとあこれあ 論ろんありて秋あきとあのあハ冬ふゆ

神集神在 川の部

音の時雨 聞とこれ 寒菊 天和本草 冬部の寒梅 梅の条ハ注を

瓜 冬瓜との 枯尾花 貞享式 此名ハ古今今ふ 部とこれ 論ありて秋とのハ冬

歸花 冬月諸木或ハ草の花ハあとあ 正花ただひなとあこれあ 鴨鴨

瓜 冬瓜との 枯尾花 貞享式 此名ハ古今今ふ 部とこれ 論ありて秋とのハ冬

兼三友物かびら

雪 ななハあ雪ゆき 養文やうぶん云い夏衣なつぎふあけあく薄うすき雪ゆきとあか
 子集こあひま 佐保路さほろとあこれあハ雪ゆきとあ此説このせつありあハ九重ここのへとあ
 とあハ雪ゆきの一重ひとへとあ山姫やまひめとあハ雪ゆきとあこれあ

子集 佐保路とこれハ雪と此説ありハ九重と とハ雪の一重と山姫とハ雪とこれ

冬 加

玉海集のつらら帷子雪花衣こハ男文字を書

證とさるふ足まり俳諧歳時記つらら

片葩つららつららつららつららつららつららつらら

雪鹿文云々つらら雪と略してつらら一説に繁

葉の兼ふ似る故の名青蓋云後集附

鶯の音ふらつら雪降此句語勢と按つらら廉文の

つらら如くつらら雪の略つらら北越雪譜

つらら薄雪とつららつららつらら

古訓里俗つららつららつらら一尺二三寸横七寸五六分

云ツヤカラつららつららつららつららつららつらら

つららつららつららつららつららつららつららつらら

皮つららつららつららつららつららつららつらら

ものつららつららつららつららつららつららつららつらら

五六寸より三尺餘横一尺二三寸山竹つららつららつらら

つららつららつららつららつららつららつららつらら

為つららつららつららつららつららつららつらら

者つららつららつららつららつららつららつらら

てつららつららつららつららつららつららつらら

鐘氷つららつららつららつららつららつららつらら

さゆつららつららつららつららつららつららつらら

衣賣つららつららつららつららつららつららつらら

宵露宿つららつららつららつららつららつららつらら

和らげ衣服つららつららつららつららつららつららつらら

清水紙子つららつららつららつららつららつららつらら

白紙つららつららつららつららつららつららつらら

南都東大寺つららつららつららつららつららつららつらら

者つららつららつららつららつららつららつらら

浄瑠璃つららつららつららつららつららつららつらら

雑談野郎つららつららつららつららつららつららつらら

紙衾つららつららつららつららつららつららつらら

蕪著つららつららつららつららつららつららつらら

種つららつららつららつららつららつららつらら

くつららつららつららつららつららつららつらら

冬つららつららつららつららつららつららつらら

かつららつららつららつららつららつららつらら

一人これに従ふとの式正月十九日の夜の行法も同

し節分の朝ト部家宗源殿ふ於て神道護摩と

修を疫神齋札三千枚と出

諸人求めて門戸貼あり

會 九日 紀事 梁の大道二
年十月九日入寂大

小の禪刹悉くこれと修を元亨釈書達磨者南印度

香至王第三の子之蕭梁普光元年庚子支那未り

武帝のよふ小茅一義と説帝契は乃江と渡り

魏入高山の少林寺小居九白年と経て天竺小帰る

三叉物玉の塵 玉の屑同じ たびり雪 帷子

雪の条より 垂氷 注不 湯婆

併せ注す 炭團 及 湯婆

和漢三才圖会大年保唐音按湯婆銅と以てこま

と作ふ大と枕の如くありて小き口あり湯と盛樽の傍

小置て腰脚と煖む因て婆の名と得り竹夫人と此

と寒暑懸隔の重器とも○黄山谷湯婆詩云小姬

履足 華ふ 和漢三才圖会單皮足袋 俗踏

鹿の皮と以て半靴とも名つけく多鼻と云ふ單皮の

二字と用之く九冬ハ皮と用ひ夏ハ棉とりちふ

大根引 集解六月種と下し秋苗と云ふ冬 菘春

の初角と結ふ貞享式大根引此詞ハ冬の當用あり大

根と畧して音語よりハ京家のハ引引効ふハハ

刀息 部の息 鷹 時珍曰鷹鳥骨軟と以て

毛角あり故ハ角膺と云ふ其性猛爽故ハ鷓鴣と云ふ

天和本草鷹の類三種あり鷓鴣の類鷹の類 鷓鴣の

類ハ和漢三才圖会鷹の尾十二枚長ハ五六寸ハハ

合て赤ハ四ハ黒白の重紋あり天寒ハあつときハ尾と

疊むと一枚のときハ尾損傷ハ遇るときハ漆樹の汁と

取て他の鷹の尾と接尾の下ト三品の毛あり尾末毛

とのハ乱糸狭衣下の尾と石打と云ふ尾の端の白毛

と杓華と云ふ背の毛と母衣毛と云ふ其腹は出る白

毛

毛

毛

毛

格ハ野山ノノとして結むすぶ一切立木の枝のあふふ外しん禁ぎんいぬらぬもの枝を羽はねをくくもの又また羽布はねのふ羽布はねのふをはとつハ垂布つるふふ似にたり鷹たか鳥とり鞆たもと和名抄鞆和名抄鞆衣也鷹鷹三百首抄衣也鷹三百首抄公方家家ふふけと鷹鷹揺揺同上鷹鷹あつりハ鞭むちより長き手てささつり鷹鷹揺揺りのあつり夜居よぐの時鷹鷹さつりて寐ねさせぬ道具道具當時鷹鷹の藥くすり柳柳の露露切蓮切蓮ハ鞭鞭とこのまう用もちらる鷹鷹の藥くすり水水夜取水夜取水恩恩沢水沢水條吹條吹鷹鷹鷲鷲經驗方經驗方柳柳の木の上ふ虫あり状状ち錦錦の帽子帽子鳥鳥の卵たまごの如ごとして斑まだら文あり其虫と取と水水を持もて食くは和わしと飼かふふ神功ありとつハ切壺壺の水水柳柳の露露茶茶基基房房御鷹御鷹飼連飼連哥哥抄抄切つらの水水ハ鷹鷹の葉はあり糸糸の朶朶の切口ふとありとつ水水あり柳柳の露露これハ葉はの水水ありと一説ハ夜取水夜取水恩恩沢水沢水意意慕慕水水ありハ皆皆水水の紅水紅水のこありと條吹條吹鷹鷹三百首抄鷹三百首抄抄抄條吹條吹ハ青竹青竹とめめて切口よりつる意氣意氣ふ鷹鷹の羽はねのめと直ちまをのつハ錦錦の帽子帽子同上錦錦の帽子帽子といふも色いろよき紅葉もみぢと取とてと鷹鷹の

風風と洗あ鷹鷹の經緒きんぐ鷹鷹書書經緒きんぐとハ付とつハ經緒きんぐハ鷲鷲よりより小こき鷹鷹あり大鷹おほたかありとつ繩なはとつ鷹鷹の四十尋いじゆの繩なはありハ九經緒いじゆハ二十いじゆあり鷹鷹の餌袋えらふく鷹鷹三百首抄鷹三百首抄水餌みづえらとハ洗あハ餌えらのてれハ土餌つちえらをくり付つて鷹鷹犬いぬ打餌うちえら犬いぬ三品さんひんあり田た犬いぬらハ飼かふ鷹鷹犬いぬ田た犬いぬ則すなは鷹鷹犬いぬハ打餌うちえら鷹鷹三百首抄鷹三百首抄打餌うちえらとハ犬いぬの食物けものあり犬いぬハ野山ののとして飯いひは糠ぬかとつ餅もちの如ごとして鳥とりと立た鷹鷹時餌ときえらあり竹たけ瓦がわ鷹鷹と取と具ぐありハ形かたち丸まるき小こ箭やあり口くちよりありあり沈しづむときハ口開くちあき引ひ上ある時ときハ口閉くちし是こハ餌えらと入いて湖底うみハ沈しづめおきて雞魚けいぎょ蝦えびと取とハ冬ふゆ月つき多おほ湖西うみ堅田かたの漁船いさぶね一艘いっさう竹たけ瓦がわ數かず百ひゃく積つ沖おき漕かき連づ出でてと沈しづむ漁人いさなの産うみ芋いも環たまハ字あと用もちハ非ひハ釜かまハハといふのち流川ながハ短日たんじつとせと魚いと取とる具ぐありハとつハ大おほ連づや

冬、た

月令廣義 漏刻益四十一刻夜 **吞魚** 東医宝鑑吞

五十九刻 **杜詩** 寒日經驚短 **吞魚** 魚俗名大口魚

大和本草 大口魚、北土の海不多し、南海に生ぜり、

西州の北海にも生ぜり、朝鮮も甚多し、寒国に生ぜり、

冬春多く捕る **和漢三才圖會** 夏月全くあし、故

小俗鱈字に作る、味鮮魚に佳らざる、膾炙して甚佳し、

ことと塩鱈と入り、其鯛煮て食ふべし、或ハ酢に浸し

食ふもまこと佳なり、○雲鯛、吞魚の鯛、雲鯛、菊鯛と

わふ形色と **雞印酒** 寒気と禦ぐん

以て名づく **鎮靈祭** 飲之依て李と云

當麻祭 十四日、一年に兩度あり、夏のたの部

中重 ○吉田八幡の祭、公事根源この祭ハ人の魂

魄の離遊するを招きて身中小鎮子の寄持あり、

宇摩志麻命よ **大師講** 智者大師の

こと起りしと云 智者大師の

より廿四日に至る諸山大師講と修む、比叡、東叡、日光

の三山、廿一日より廿三日に至るまで、昼夜法問あり、

と論議し、一山一院つゝ会場と動じられ、天台會

と云俗もまた大師講と修し、各赤小豆粥とくく、

枯柴と折て箸として、是と智慧の粥と云 **仏祖通載**

天台智者禪師、開皇十七年十一月廿四日、寂、大師

諱ハ智顛、字ハ **澤庵清製** 九十一月中旬よ

德安、額川の人 大根の澤、奔

清と製す、○青藍云、沢庵和尚と云、これと製

を故、小名くと云、愚拙と云、沢庵和尚の墓所

武江品川東海寺にあり、無縫塔として、凡そ石と置の

と、大根清の壘は、凡そ石と置れ、と云、沢庵和

尚の墓所の形とよく似と

と、故、小俗、沢庵清と云、**十二月大徳寺**

開山忌 廿二日、大徳寺、山城国葛野郡紫野、小

あり、今日、開山、大燈、国師の忌日、

和漢禪刹次第 大燈、国師、行状、云、師、諱ハ、妙超、宗、峯、ハ

其号あり、播州、揖西、縣、生、也、紀、氏、の、子、父、母、觀、音、大

士、禱、て、誕生、也、十一、歳、の、時、同、國、書、寫、山、戒、信、律、師

と、師、と、成長、して、不、立、文、字、の、宗、風、と、云、中、建

冬 七 九

武二年十二月 宝船敷 紀事節分の夜画船と
白紙は貼け諸臣も賜入

廿二日逝去 地下良賤も画船と表の底は布て寝る今夜吉夢
あつときい米歳福と得らん悪夢と見るときハ翌朝

これと流水も付て悪夢と流るといふ和俗この船の内
小種々の珍宝と画くがゆゑも小宝船と称す近世これと

碎は銀て兒童市中小賣る 居家必用 船に乗日月
入と夢る時ハ古船を渡ると夢るときハ大富貴を

主る也 今の俗正月二日の夜小宝船を布ハ 鯛味
元禄年間より遙か後の事なり

鯛味 酒と以て煮熱して食之

噌 酒と以て煮熱して食之

袖の時雨 涙の雨をいふ同く
涙を袖のぬるさといふ也

荊 新蕎麥と秋と
し荊と冬とも

早梅 范至能梅譜云冬
至前已開故得早

蕎麥 范至能梅譜云冬
至前已開故得早

兼三冬物雪車 北越雪譜
をも此輪といふ

名要非風 北越雪譜をも
をも此輪といふ

土之正

物雪國才一の用具あり人力を助るごと船と車も
同じ且作るていと易き一面とことごとく形論み
如し夫小定りあり我る物もことごとく我國の雪冬ハ凍らざる
がいて造る木材ハ堅木を用ふ我國の雪冬ハ凍らざる
ゆゑ冬ハ轆とつゝハ雪小落入て搦事ありハ轆ハ春
の雪鉄石のて凍らざる正二三月の間は用ふべきも
のあり其時おいと里俗轆道はありしとハ俳諧の
季寄小雪車と冬とを誤るるハ誤るるをいふと雪中の
物多れハ春の季ハ似気あり古寄小多く冬よあり
実ふくわとも冬とて可なりハ山中蕉とてさうの
薪と雪車も積り引歸る或ハ山小曲りあるハ伴の如く
小縛りたる薪の轆は葉片足と遊んでこれにて揖と
とハ船と走らるる也此術学びて自然に得ると
ころハ轆と引あはれらるる哥と謠ふれと雪車哥と
いふ則蕉哥あり漸くその家もちろつときその妻子
その哥と聞て夫の帰らると知て出迎へたときけハ家
小至らむハ青藍云俳諧歳時記ハ近來雪車の句
作あるとて多しハ雪車も乗といふ雪車ハ薪と積
のこ人の乗ありくわのふいあはれと云いつつこれども

堀川後百首 そのとゆきわりふりならら山越の

い人雪車ふ乘まで 曠野集 夜とて雪舟ふ乘

さうふありうふ 此外先吟あまのこわれ 春向來令湯

たとへ實事ふありふ とゆらうの

本朝食鑑 蕎麥と用て熱湯ふ撒し 拌勿徐これ

と飲む寒と禦とのふ然れとと蕎麥性寒寒と禦と

の理 唯熱湯身 十二月 因韓兩神祭

と燗むる故をらん

中の丑〇一年ふ西度あり春

のその部 つ 十月 大莖

の花 俗よつばふこといふ 本草綱目 欵冬花の條

下云一名索吾 天和本草 葉欵冬ふ似

とらふ名山吹とらふ世俗は庭中ふ植て 玩ふ秋黄花を

ひらふ冬は其實房とありて 數の顆ありフキよりと

葉厚として光あり冬も莖葉ありて 枯らむその莖と

食らふ味フキの如し皮と去てフキの如くをべしこ

れと欵冬とのふ入あり誤今按多ふ急就章ふ索

昔欵冬は似て腹ふ糸あり陸地ふ生ふ化黄色とあり

是つて 兼三冬物つら 垂氷 友人介我云

のつてありつら 氷のまづる形容あり 尾張の家産

おもてえて氷とる形容とらふ 源氏末摘花 朝日と

軒のふらふいとけふなるなるつら のむきわらふら此

外證哥多したるふは落る葉のふと氷りさるふ俗

つら このふりの是あり 新古今 立あふ山の一づくも音

たえて楨の下葉とならふ 此三のともそ舟ふ

さるさつ このふりのけぢめあり 古人も自作せり

俗談平話ふ この故あり 強て改む このあり

〇銀竹 垂氷の異名と 網目 滑替雜談 當世

つら この部の 網目 早熊者の 網

めきと称するもの 往古とらえもの遺風と轉

牛の皮と以てこれと造て 履底ふ鐵と以下列せ物

云 今雪香と のり の是あり 炭俵

付網貫のいれの痕あり 雪の上 頭巾 御高祖

頭巾 きま 頭巾 きま 頭巾 きま 頭巾 きま

丸頭巾 す 頭巾 入 中 二名一物より 骨

冬 つ

紀事 凡商賈此月日子時ふらと祭る。蓋青買の間の利を取と氣の子の蕃息ふ比せんと欲する。子ふ供する所の膳食品毎大豆と加ふ又二股大根と供を大豆ハ氣の好む食。兩股大根ハ俗福来と稱す。○子燈心和漢三才品會每十二月子の日と貯るふいその擧とあつと。

十月

年貢納

滑津雜談 秋收とむうハ秋月侍り。當年世多くハ冬月迄ハ皆存まらぬ。

惣一々年中貢ぐもの數多ふれむ句体ふらて雜ふあふ。○青藍云年貢納といふ。増山の井及び芋環ふらんと載せむとらうといふ。炭俵集不。今の間ハ雪のうらとてとらうといふ。前句ハ年貢まんとはふられらる。芭蕉又千鳥ふらふらふ。小寒うあつといふ。前句ハ未進の高のてあ。茸用。芭蕉云。いれも冬季まつれらと。な 十月 涙の雨ふらと。名 草枯る。七葛。

兼三冬物生

海鼠

金海鼠の海中ハ無き。遼東日本の熱海鼠

と見て未生ふらものと見む。故諸書ハ載らる所ふ。熱海鼠ハ本朝ハ神代より。既ふこれあり。旧事紀ハ云彦火瓊々杵尊の時諸魚皆仕奉らる。而ハ海鼠もその時天の銅賣の命細き小刀とて其口と折く。故ハ今ハなつて海鼠の口折らる。是也。鱗尾鱗魚ハ皆山より浅青色。又黄と帯らる者ゆ。畧虎彪ハ似らるを以て虎兎と名く。全体疣多。滑軟。其腹扁くして白色。常ハ水中ふら。身と擴て薄く。扁く。水底ハ游行を如し。物ハ觸るとま。ハ横ハ縮む。水と離るふ至て。半片の胡瓜の如し。其口折て齒肥ふ。其目切て珠ふ光あり。共ハ小刀の痕の如し。冬月盛不出。春月の終ふ。金海鼠ハ奥州金花山の海辺より出。金色と帯ふ。故ハ金海鼠と名づく。このこと。天和本草 生海鼠の余云其腸黄ふと長し。

冬

申されたるまに降とひまふ
初雪の宿と附りて

十二月 温槽粥

粥八日 増山の井五山とて又禁中とて有と 御献
行事 温槽粥 醃 鏡 燒栗 菜ヲコメカニキリロカニテ
其ラスニ 三水記 本朝とて臘八粥と温槽粥と名
今日造る所とて昆布 市街 大豆 粉菜と相合し

とて製表とて是叙尊成道の日あり 傳燈録 叙迎佛
檀持山とて非非想と字ひ二月八日成道 夏の十月ハ
夢梁録 十二月八日と寺院とて臘八のへ大 波等
刹等の寺俱ふ五味粥と設く名臘八粥云

滑管雜談 廿日りの人の妻女白棉巾とて頭面
と覆ひ睡ふ赤き前歯と掛手不蓋と携へ遍く人家
と懸し米銭とをいふら波等と名し廿日小至く
止むとて世と節季にハ諸国あり波等すとのハ京師
心のまわりて

の 兼三冬物 鶉鶉

他亦あり
十二月 荷前の使 吉日とそとふり 拾芥

抄ふとそとふり 諸國より献る御調の箱
と十陵公墓へ奉らむとふと使ふ

十月 口切

壺の口切といふ今月の始より臘月小至ふ九膳食と
会席と称し家の豊儉小随て佳者美味と求めこと
と調梳折布小至る迄とて新中と 中 九茶壺の蓋
の間小糊とて堅く紙と貼本風濕茶と侵さんことと
念ふか故あり初冬小至て小刀とて紙と貼し合籠を
截蓋とひらく茶と取これと壺の口切といふ ○利休日

壺の口切の節ハ橙黄く橘緑りの時
○口切やはとよハ金の事 其角

兼三冬物 懷爐 莖菁 莖漬

本朝食鑑 莖菁の葉莖と採く淹鞠とて收藏これ
と莖漬と号し年と経て又佳く江州の製造と近江
漬と号し珍とも羊と経て酸味と生むるものゝ不佳
あり賀茂の里人の造ると酸莖と号しこれと賞美

冬、 ねく

朽葉

一説ふくち葉の色と結びても
冬あつた朽の字重き故あり

くさ野

八雲御抄 冬の野とのへ 〇冬野の枯くさ野とのへ
濟野と混むるべし 〇くさ野のくさめが下ふくさ野

角鷹

鷹の類ありて大少悍き者
其の形色雌雄大小

皆鷹に同じ 鷹より大あるて三倍せり 雛に似て
小く天和本草 中上ふ角鷹とも養て鳥と捕ふ

枯

草枯ふ手あて
ぬ鳴もあり 利牛

鯨突

和漢三才圖會 鯨音
鯨字 海鮪 勇魚 兼

三伊佐奈 狀ち畧 鱗に似て肥て山く長く周りと等し
其色蒼黒くく 鱗あり 鼻の上の骨高く起り頂
の上頰の前ふ朝と吹穴あり 口濶く下唇上唇より長
くして頷の前ふ出て舌もまた廣し 九鯨六種あり
性喜て鰓と嗜て諸魚を敵せども海船若尾鯨小く
ときこい必覆をも冬北より南ふ行春ハ南より北あゆく
肥州立島平戸辺ハ節分の前夜と盛とて 紀州熊野浦
ハ仲冬と盛とてこれを捕ふ 鯨と刺鯨と呼て森

十月 獻履襪

崔浩女儀云 近古婦人常
小冬至の日を以て履襪

といハ榿木と以て柄あり 鮮の頭は繩と着て船の柱
ふつとく其鮮鯨の中るときハ柄ありて肉ハ鯨の動作
小をくはいて深く肉ハ入て板も鮮の柄板もいとも繩
着てある故小失をとも一船の進退と當手と入て呼て羽
指といハ長き袖短き衫と被て宛も軍船の如し 近頃
大繩の細を用いて豫めさきと繫き木柱と擲故ハ百り
一失

和名之 越谷五山遺稿 我朝の製ハ大指のりいめを
足袋ハ元 空也忌 言曉の鉢印 空也上人ハ天禄
三年九月十一日

寂也年七十と元亨親書ふとそり 〇空也堂ハ極
樂寺と号も四條坊門の南堀川の東ふあり 鉢印
亦此堂と守ふ傳ふ云極樂寺ハ元三条掃部あり
掃部道場と称もむ 空也上人勝光夜々執行
念佛と唱へ洛中と巡る北山小住ととき毎夜鹿来
る上人其声と愛して閑居の友とも一夜来らむ心

冬

と療し血脈と調ふ故小是と葉
食との諸獸も又さきと食ふ者也

手花 大和本草葉の形莖葉の如く又此の葉
の如くして甚と大なるを盤の如く冬爛落

を葉の如く一カで岐多し七八より白花を
開き黒き實あり毒あり木の高十五六丈過ぐ

三冬物 **山眠** 臥遊録冬山慘淡
十月山

科祭 上三日〇一年ふ西度あり
山神樂

内侍所の神 **山の神祭** 神代卷伊弉諾尊
軻遇突智命と斬

祭之山の神の社の辺の樹上小幣と
十二月厄

塚建る 節分の夜吉田神祇官みゆて行く
その式庭上小塚と築くは厄塚と云

正月十九日小至 **厄拂厄落** 紀事四十二歳の
男子自ら積身禪

と落も是とふらうゆくとらふ厄と拂ふの義あり今
宵乞人綿巾と以て面を覆ひ自疫拂落と称し

終夜街衢と往來を〇唐土も巧者のやぐらひと
りふとをこころそり

十人群とあり神思お装ひ男婦鑼鼓と以て門と
巡り銭とをふらふと打夜胡と名く又驅祟の類

目鱈取 和漢三才圖會八百字奈岐北國の川次ふ
多し大抵又むらり大ありのハ二三尺背

蒼黒くして光あり腹の色稍浅し其首尖と口裂
を以て口く齒細小く針鋒の如く而眼の淺小各

七點あり目の如く星の如く錐の穴の如し目とありふ
ハ數あり故小名く〇江海處をみあり信州諏訪の

海小取りのを名産とも上諏訪下諏訪一里むらり冬月
氷もちく厚と二三尺よ及ぶこの時よ至つて鱈と採る

先氷の上よ小家と營むふ火と焚て穴と穿つその穴ふ
柱と建漁者の休し所とて又細或ハ繩と入べき穴と

冬 ねまよけ

穿くわとてふ焼火と以もてて延えん燼じんと入い共いっ餅もちと以もて鋤あ

まま十月じゅうがつ松風しょうふうの時とき雨あめ 凡たゞ茶ちや会かいの炭すす又また花はなハ上かみ下した手て

兼あま二ふた爰こゝ物もの廻まわ炭すす 凡たゞ茶ちや会かいの炭すす又また花はなハ上かみ下した手て

花はなとと習なら同志どうし相あ集ありて上かみ座ざより下した座ざに至いたる迄まで

十一月じゅういちがつ當宗たうしゆ祭まつり 上かみ座ざ日ひ 松尾まつお祭まつり 同日どうじつ

十二月じゅうにがつ豆打まめうち 世よの部ぶ節せつ 分わの条じょうふ

注しゆ 十月じゅうがつ玄猪げんじゆ 亥かいの子この餅もち 御ご覽らん

初冬しゆとう其その月つき亥かい了り建たまま亥かいのの日ひ亥かいのの刻とき餅もちと食く

へむ病やまひひあし錦繡きんしゆ万まん花はな谷や此こゝ餅もちと食くハハ方はう病やまひと除と

政事要畧せいじようりやく 亥かい多た子こある者ものあり毎年まいねん十二じふに子こと生な

ひ閏年うるしどしハ十三じふさん子こと生なむ故ゆゑ婦人ふじんとを養やしなふとて此こゝ

日ひ小こ至し了り餅もちと供くして神かみと祈いのる〇のぬの子このの其その始はじめ

詳しやうあらむとて〇のぬの延えん喜き式しき也なりと載のりて〇のぬの古ふるくも

麻あ栗り柿かき糖とう此こゝ七しち種しゆの粉こなと合あせて〇のぬの正せい親しん町まち

公こう通つう脚きゃくの抄せう并なら御ご湯とう殿でん記きホのよの式しき委いくくミミスス〇のぬの

〇のぬの一いつ説せつ小せう撮さつ勿ぶ能のう勢せい郡ぐん木き代だい村むら小せう門もん太たい夫ふうとのハハ者もの任にんせ

小せう起きまりむむ此こゝ所ところ及および切き佃でん大だい丸まるの近ちか里りハハ山さん城じやう八はち幡ばん

の神かみ領りやうより今いま善ぜん法ぽう 下した元げん日ひ 水みづ官くわん解かい元げん書しよ

故事こじ 正せい月上げつ元げんハハ天てん官くわん福ふくと賜たまふ七しち月げつ中ちゆう元げんハハ地ち官くわん罰ばつ

と赦しやす十月じゅうがつ下した元げんハハ水みづ官くわん元げんと解かいす事こと文ぶん類れい聚くわい正せい

言ごん要えい云い下した元げん三さん品しん元げんと解かいす水みづ官くわん主しゆ禄ろく百ひやく司し

間まの善ぜん惡あくを檢けん察さつ〇のぬの天てん闕くわつ論ろん進しん呈てい

十月じゅうがつ冬ふゆ〇のぬの一いつ書しよ冬ふゆ〇のぬの立た立た冬ふゆ牡丹ぼたん

天和本草てんわほんそう冬ふゆ牡丹ぼたん八月はちがつより葉は出いで十月じゅうがつより花はなさく

臘寒らつかんの時ときも花はなあり九く祀まつりするハハ人ひと功こうと以もて天てん地ち造ぞう

冬ふゆ けふ

源氏朝顔の巻 冬の夜のそら月
りつぐり、冬の月 小雲のひりりあひるる空こそあや

う色まさむの身りして、此世の外のことまであひるる
まはしあひるるもあはれなるも残りぬとりのあまきまきま

きくありふひひわきり人のこころあきくもてこそあ
げさせくあふ、河海抄 皇日記云、あきくもて望のころ月を

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

源氏朝顔の巻 冬の夜のそら月
りつぐり、冬の月 小雲のひりりあひるる空こそあや

う色まさむの身りして、此世の外のことまであひるる
まはしあひるるもあはれなるも残りぬとりのあまきまきま

きくありふひひわきり人のこころあきくもてこそあ
げさせくあふ、河海抄 皇日記云、あきくもて望のころ月を

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、
あきくもて望のころ月を、あきくもて望のころ月を、

吹革祭 八日祭る所智恩寺の鎮守元賀茂明
神あり、或人云、三十九世満天和尚稻

荷八幡とてそとにあり、稲荷の火焼や、のあひるる
十一月八日鍛冶鑄冶石工の徒もあきく吹革とと

又あつたの家より、この神と祭る、江戸あて八日の未
明吹革祭の家より、檣柱と投る、群重争ひてこ

とと拾ふ、毎年此、初鰯とて、
戲と以家例とて、この部注、

十二月 札納
紀事 良賤年中受る所の諸社の
札と神社の納め、札納とて、

古曆 新曆
向景明除夜詩云、今年今日
不可留明日明年更可愁

分歳 風
記除夜其先事と祭る、長幼聚て飲
む祝頌して散る、これと分歳とて、

十月
公事 根元 十月一日、先御夜ぐあひ、掃部
寮夏の御装束と撮して、冬のもあきくもて

更衣
まへ、天皇南殿ふ出御あつて、節
會のり、これと更衣の旬と申す、

興福寺法華
冬、ふ、こ

會 南都興福寺小於て修もと元亨叙書和銅三年

三月藤原相不比等和州平城よ於てまこと建つ其大殿の像大織冠造る所あり公事根源九月廿日

七ケ日の間南田堂ありて妙法の大会とひつ十月六日長岡の大臣内磨の御忌日ふ御とあり始て行せ六日小此金と行せ

金毘羅祭 十日讚州鶴足郡小あり祭る神一座 或ハ三輪大明神或ハ素盞鳥尊

當山の形ち象の頭ふ似たり故小象頭山と号も開基 詳く一説小傳教大師入唐帰朝の日金毘羅神

と勸請せとせ燈十八町悉く石階峻岨あり又 崇徳院の廟と以せ小金毘羅大権現と称も合せ祭る

ゆあり○京安井觀性寺小崇徳院の社あり 金毘羅の社と称も八月二十六日祭れ小春

小春日 初学記十月八天時和暖春ふ 小六月 似たり小春月と小春 殿和訓 木荒の

の義あり木枯ああ嵐とらしむハ音便 あり五十嵐といも同じ字書ハ風過米

上曰魁とのハ蘇も同 兼三冬物粉雪ハ草

ト風ハ倭の俗字ト 小雪丹波のハ雪ハ米とハ似と

見立てハ遠近集降ハ氷 小米雪 雲と篩ハハ小米ゆき 豊近

月令孟冬之月水始氷伸冬之月氷益壯季冬 之月水方盛○孫卿子曰氷生于水而寒于水

○薄氷厚氷氷柱垂氷銀竹氷花 氷面鏡ホ各頭字の部ハ注 氷ハ氷

藻塩草凍閉る也新撰六帖冬来てハ田川ハ氷

揚延秀敲氷文曰ハ緝子金盆照曉氷ハ彩

の聲 絲穿取當銀鉦敲成玉磬穿林響忽作 玻璃碎地声○一説ハ大 氷の衣 毛吹草水張

寒の時氷小音ありハ玉海集水干の衣とハ氷ハ遠近集氷也

や羅綾の衣下紅葉○青藍云ハて物と蔽ハ包む

物と衣とりふ同ド、氷の水と蔽ひくるまよとあたら

てのふり、さるいよ出せる句意と推こまうべし、但毛浪

草小出せる説、**氷の氷化** 酉陽雜俎開成の末阿陽

附会といふべし、**凍** 注不凝 煮凝 遠近集煮つみまや

如し、**凍** 及 **凝鮒** 煮凝 遠近集煮つみまや

鮒煮凝と**火燧** 置炬燧 骨董集火燧といふも

のあり火燧のまき以前ハ物小尻けて火鉢せとぞ

暖めたるより古き絵巻物ふその体とせり、**猿蓑** 活

こつふ旅のそらこ **木の葉** 落葉 了くせと落葉

や置こつ芭蕉 **木の葉** と木の葉松て

りふときハ同ド、別いふときハ少し趣意とふひあり其

意と得べし、つれく草木の葉落るも先ッ落てぬむ

ふハ下よりきざつてつるふ **木の葉の雨**、**木の**

葉は時雨 **白氏文集** 風吹枯木晴天雨 **千載集**

まをらちる楨の板屋小音ハてわら

ぬ時雨や木の **木の葉衣** **南越志** 獮人冬 **鵝毛**

葉をうも〜ん、 **太平廣記** 女仙部云秦 **このこと** の糸よこそし、

の時婦人草葉と衣る、 **兄鷄** 鷄の雄あり、脚極めて細くしてとまをせり、

このこと、**兄鷄** 鷄の雄あり、脚極めて細くしてとまをせり、

〜〜〜鷄以下の小鳥と捉るちつこ、

十一月曆の奏 朔日 **公事根元** 中務省より

ハ王上南殿小出御ありてこれを御覽あり、出御あき

ときハ内侍所あつて曆と奏せり、飲明天皇十四年

百濟の博士が奉る、**雍州府志** 曆毎年南都幸徳

小加茂氏の新曆と受く、梓小鏤めせ小行り、今專

大経師曆と称も、○今免許と蒙つて曆と取く所

山田勢三嶋伊江戸武蔵南部奥世小南部のめくら曆

といふ多く重く、**五節帳基試** 中の世 御前試

日月の識とせど、 **醉** 中の **童女御覽** 日 **公事根元** 中の世の日と、**五節**

狩の使 **帳基の試**、ハ常寧殿よく

冬 **こ**

申申の時を非時と法師より坂
 本へ下りてあはれびの奇合て事と名つりて我々世事
 して食をとりていふ事と載りて按さるふ十月の
 日の短き頃を年の暮事せりともる故に八月を限
 りて食とあはれ當時の僧家の凡俗の事納とて
 二月八日也 郡あはれ八日より三度食を事始り
 とのひふむらも夜 江呂鹿子 二月八日事始り十月八
 日事納 今の俗二月と事納十月と事初なりともあ
 りて正月の式はかきし事納の初め○金公事と
 つりて事納は座外十月と事とてめりて
 證を多し今日て者と食を 還竟依料 料理物語 永
 云のころあはれき牛房 豆腐 芋 大根 焼栗 くらを
 る中味噌をとりてあはれいふ事申すりていふ
 飲とわりて追々ふ者も馴れふ似るもの通ふを以て從
 然必ともあはれいふべし○月並世話より口小籠とつり
 方相の目もそとく邪気とて事あり云一説はむと
 小籠とつり八九字のものを云と春の 五條天神祭
 この部事始の条ともあはれいふべし

節分勝の餅賣

祭る神大已貴少彦名より祭礼

白木漬

九月十日小行へ毎歲節合の夜

京師の士民赤詣多し白木と買てこれと自家か燃く
 又小團子の餅と食ふこの餅社の傍なる廢軍地藏
 小供もる所の餅ありよりて勝の餅とて或はゆい
 とつりていふ名をもとめりてこの二物喜別ふ
 ようて官よりいふと賣りむ近世 曆の果曆
 その料と社司あはれ製せしむ

卷納一曆巻返

古寺に多くあり 新撰六帖一

のころ日敷のむと

元

十月夷講

廿日この月

八家例よりて日定らる商家の徒西宮大神宮とま
 つる 本朝通紀推古天皇九年三月聖德太子始りて
 市と設けて商買とていふこのころ 經子神
 いて商買鎮守の神とていふ 又此神鉤垂る像
 と設る日本紀に載る所事代主命遊行して出雲
 國三穗の寺に在し鉤與と以て樂とていふもいふ

冬 こえて

り所ありむとを住家として細代と司る者との酒

代守細代人とあり様葉とつこと数珠もあむと

細代守と草〇とことし神并記北方水

音や夜更の細代杭林陰厚氷の厚と百丈

日の思心もあむと霞玉われ大戴礼曾子云

くくあつ水子葉あふ蓋盛陰の気雨水あむ時ハ凝滞して雪とあふ

陽氣博してとこと骨と相入るとこと消散

下り水小因て霞とあふ〇霞酒ハ南都の産く又

霞酒とも酒中霞ふ似ると糟あり天子集玉より

も酒あふると霞くれ〇年浪草小霞地の綿霞

ホを冬季の部不出せるハとつ古抄ハ雜と

あがけの鷹和漢三才圖會菓と離と自食

新撰六帖山ごるあがけの鷹の手まね霞魚部の

てもころあつと君やもあふと丸為家

くあつ余赤切戦赤切十月赤豆の粥荆楚歳時

とことし

記共工氏不才の子あり冬至の日と以て死して疫鬼

とある赤小豆と畏る故ふ此日赤豆粥と作り食し

とこれ増山の井本邦も冬至ふ

と穰あがけの鷹と穰あがけの鷹と穰あがけの鷹

と赤小豆の飯と用とるもあり穰葉

膳まると外ふれあふ赤拍良品相嘗祭

上ノ印先代旧事記今日天皇正禰殿不幸し三公

九卿と徴相嘗の詔と直下りハ三輪住吉熊野熟

田廣田射駒降劔大和津島の大社と祭る其國の

國司小命じて其國の宮倉の初米と以てこれと供其

社司神巫亦官幣と賜ひて禰礼と行ふ阿知女

公事根元この祭也きとつ絶てとつ

かの部神祭十二月淺草觀音追儼

の条り出

除夜よ江戸金龜山淺草寺小あり今宵赤詣堂

り七日中小充つ初更のころ鬼形の者一人堂外小

出又一人方相氏の假面とつぐりくる者これと追て堂

と巡る後除夜の札三千枚と撒して諸人小興ハ春

冬、わ

町ぞく四日市ふあり三河万歳江戸小まつて殿士の
才藏と備ふより毎年四日市をてこの價とて
備ふよりふりまを **逆蓑** の部同見
才藏市とふりまを **逆蓑** の部同見

冬物銀竹 羅山子曰銀竹ハ雨どのふあり李白
詩云白雨映寒山森々似銀竹○

垂氷と雨 **切干製** 切干ハ冬月菜菔と切ると承
と雨説し **切干製** の如くをこまこと織羅菊と云

遮ふ擴け晒乾を故切干 **金海鼠** 鼠の部生海
と名く尾州多く製す

北窓塞 漢志大陸ハ北方北ハ
伏し陽氣下ニ伏を **十月添**

宮線 荆楚歲時記 晋魏の間宮中紅線と以て
日影と量ふ冬至の後長きと一線と添

文昌雜錄 唐の宮中女切と以て日の長短と
換ふ冬至の後常の日ハ比し二線の切と増と **十月**

衣配 年のそとの料ふとて人々ふ衣と贈り
とて **宇津保物語** 源氏玉葛の巻示す

十月維摩會 十日より 南都真福
十六日迄 寺ふりて

この會と修む **故事要畧** 慶雲二年正一位大政大臣
聖廟安穩社櫻傾覆ふききもめふ謹て弘誓と奉し

この會と開く **元亨釈書** 齊明天皇三年十月内臣
鎌子山階寺と建 維摩會と修む陶原の家ふ於く
山階精舎と創り維摩會
と設く是維摩會の始と

兼三冬物雪 天戴
地積陰温うあるときハ雨とて寒あるときハ雪とてあふ
春秋元命包 陰陽凝て雪とてふハ五穀の積あり
○六ツの花玉の塵 兼雪 雪吹雪吹倒これ雪、ちり

雪かどむり雪、ふひら雪 粉雪降、小米雪、以上頭字
の部ハ **雪化** 韓詩外傳 凡草木の花多く五出
并て **雪化** 雪の花独り六出 **奈願文** 正徳末至印
本末考し

風やある夜ひとく雪の花菊匠 因ふ云此雪の花の
句ハ五月雨やゆる夜ひとく松の月とある雪中菴蓼
太く句より **雪消し** **紀事** 十月多く雪や貴
ハ先吟ふ **賤粉餅並葉実木の物と**

冬
ゆ

互小贈る是と雪消しとつふ言さうに **雪まゆき**
とんと食へむ寒気と忘るの謂あり

御傘 **雪まき** 冬あふ時雨ふ風のそひとつるあり
雪のそひとつるを **雪まき** といふれ 雪吹ふ似る物あり

雪空 雪の降 **雪気** 雪催ひ 雪けふ雪と
空といふ

同 **雪の聲** 新撰朗詠 苔庭木落紅與跡雪確
月晴雪有声 藤原明衡 ○ 雪は垣

小裏表あり雪の声 嵐雪 ○ 青藍云月令 博物志云
静小窓ありわらる音といふ 云 愚按 雪の音は

月晴といふふ合を 樹木或竹ぞく積 **雪まじ**
とる雪の風のそふ落る音といふ也

北地あり雪まじといふ 雪の音は 雪まじ
小應まじといふありと雪まじといふ

竿 又深雪のちり物のちりふ立おくとも雪草と
雪まじ

雪まじ 寒気指と墮きといふ **雪礫**
是は霜やけと同じ

雪打 小石の如く雪と相つらめ **雪轉** 雪丸け
投打合と云 雪中の戯あり

続虚栗 君火のけとま物 **雪佛** 雪布袋
とせんゆき九老 芭蕉

雪達磨 新拾遺詞 各雪して丈六のむけとつ
けり奉るとして 供養とて 云々

枯尾化 此下ありくねむらん 雪佛 嵐雪
○ 雪布袋 雪達磨 雪中の戯は作る

張文潛戯小雪獅子 **雪女** 深山雪中稀小女の良と
と作る文あり 現まされと雪女といふ雪

の精あり **雪の山** 雪山と音ありと云
天竺の山の名に難とん

女の肌の白きと雪 **雪履** 注よ **雪垣** 北國大雪
ふとつる十月初より用意して人家軒まうり 選

き丸太材と立掛して横と結び貫と編み付て垣と
深雪の内其隙と道とて隣家

十月 虎耳

十二月行
雪の下より名ふ付て冬季とせらる

年
炭俵行年よ京へ
あつて状はる湖春
め 十二月 和布折

の神事
晦日長門國文字間の北あり、卑人の社を
稱も祭る神五座王依姫彦火と出見

豊玉姫不首合阿度目儀良あり、祠の後ふ一巨石あり、
石ふ因て祠とら、前ふ謁殿舞殿神厨あり、謁殿の下に

石の鳥居と建鳥居と出ま、石礎ありて海の底に達
を虚潮日とのとも、の窮む、丹とせむ、十二月晦日

夜四更ふ祝夜冠帯、祝と兼て携へ炬と奉、石礎と下
己海不入和布折と歸る、終夜祝詞あり、元旦ふ和布と

神前ふ奠し、既りてとれと
撒し、国主ふ献るあり、**み** 兼て物震

廣雅震は両雪雜り下るあり、○とこれみとるとも
深川集附御簾ふとら、下加茂の社家

みどき酒
霰酒ふ、**三の花**
霜の異名あり、傳
物筌水の花の轉

音とも又雪と六つの花よふ
水夷
鼻中ふ水
と出とと軌

水鳥
浮寝鳥○時珍曰水鳥ハ夜夜水禽
ハ味長くして尾促

寢鳥水鳥といふあり、掘川百首水鳥の玉藻の床
のうき枕ふとせむい、いれうまきま、馬房御全

水鳥ハ昼もよく寝る物
鷓鴣
桃虫、巧雀、夕匠
機雀、巧々、巧婦

故小夜分ふあらむ
桃雀ハの諸名あり○時珍曰状ち黃雀小似て小し
灰色りて斑あり、声吹嘘々如し、喙利錐のこく、其

華毛出と取、巢と為る、大さ雞卵の如くして、こころ
繫く小麻髪と以て、至て精密とあり、樹上ふ掛、或ハ

一房二房故小莊子小云、林小巢うて、一枝不過、貞
享式古抄ふ、秋ありて、渡り鳥の部小入とら、山雀

日雀の類ふ、いわらて、存鴨の物、小連立ふ、民家の軒
小馴て馬防と傳ひ、水棚ふ、あとの声の清とら、茶更

小寒、春帰る姿、もよそふ、**木兜**
和漢三才圖會
木兜、日本紀用

決、冬とせむ、**冬**
み

大さ兄鳩の如くして全体褐色小白彪の三つ似
 とりのわん、臆胸亦同色横小白彪あり相立て此腹
 の文似く人頭目猫の如く眼の外白圈と作て眼中
 黄赤やてよく旋轉を毛角小き黒虎あり夜生
 裏ふ似く、世谷頭巾と鳴鶴、蒙りあり或は平の
 皮を以て圍と作て諸鳥と執る、貞享式、古抄、秋の部
 小入られ、渡鳥やあつ、色鳥おしほらむ、鳴声
 の物樂き、寒さを厭へるゆゑやも決して冬に定む、
 水洞、続猿蓑水、池の中より道ありて、
 句冬えふつれ、冬、季勿論、

十二月 深山莽草

其木高く上らむ好て偃臥して勝蔓の如く其色
 灰白葉莖上小叢生を冬と凌て淵まも形ち蓬萊紫
 の葉小類く長大あり冬梢の間ふ五出碎花と着く
 穂となりて簇生も彩紅褐色の実と結ぶ樟柳小似
 て大し、和漢三才圖会小深山極とつ、四月細ま白
 花とひらき秋實とひまふとら、同名別種あらん、

十二月 御髪上

紀事此月吉日とせし御髪
 上行も極薦とせと奉る主
 殿官人松明と献衛士と勤む性音、多々午の日
 と用ひらる、事根元、藏人御、のけり、と給りて
 主殿寮小ひ、
 衰和田の鯉取、鹿支白此事古
 ひて名くあり、式あり偶和及、

芋環小くえり、和漢三才圖会、鯉ハ城洲淀川最も良
 武州浅草川常州箕和田も小次、本朝食鑑箕和田
 の鯉ハ流と濁らる、清くも、江近くも湖、通、
 魚稍肥て脂も多し、里入寒中ふと、捕る、鯉、
 大あり三四尺間魚人ふて、三冬、尺、
 初冬仲冬、季
 くと懐き捕る者あり、冬、これと三冬

十月

花君う、わらひ、折入も、大伴家持、
 焦糟と食ふ、朔日、事文類聚、咬人、十月、朔日、多
 煎楚の人多く焦糟と、
 食ふ、お、糖、小、
 十夜、五日より、無量寿經、此
 十六日迄、小、於、て、善、修、

冬、み、志

まると十日十夜をいひ他方諸佛の國土も善とす
 千歳小勝なり故小十夜といふ○洛東鈴音山真正
 極樂寺真如堂天と以て始とす本尊慈覺大師の作
 り此像灵驗ふりて別時念佛と始むこれと十夜と
 り蓋伊勢守貞國十七日○洛陽惠日山
 としめてこれと修む **聖一忌** 東福寺開山忌
 也紀事今日方丈ふ付物と飾り午後聖一の像を腰
 興に乗て寺僧前後ふ直從ひ經堂の須弥壇ふ安置
 此開山忌昨今と年中遊覽の終とを故ふ寺當納
 とり入聖一弘安三年十月十七日寂を偈日利生方
 便七十九年欲知端的佛祖等 **時雨** 夕時雨
 傳云の真筆と開山堂揚 小夜時雨
 益夜のわらわら陰晴と論せを時々急雨ありこれ
 と時雨といふ初時雨村時雨泪の時雨袖の時雨川
 音の時雨松風の時雨各頭字の部ふりて注む○
 液雨時珍曰立冬後十日と入液といふ小雪ふ至て出
 液といふ又葉雨といふ百虫を食と飲とら伏蟄し
 て来春ふ至る和俗液雨といふと訓も時節を取

合せて **兼三冬物 霜見草** 冬菊の異名
 松の木うけの霜見草うらゑ **霜** 今朝の霜 朝霜
 霜夜 霜日和 霜解

そと霜 天戴礼 霜は陰陽の気あり陰気勝るとと
 凝て霜とあり秋名ふ霜ハ衰々其と氣慘
 毒ありて物皆衰ぶるあり○青女さひとあり **霜の**
 三ツの花ハの異名あり各頭字の部ふ注す **霜の**

花 華詠 天至中青州盛冬ふと濃霜 **霜の**
 と屋瓦ふむく皆百花の状とあり **霜の**

劍 春秋感精符 霜ハ殺伐之表 **新撰朗詠霜詩**
 云寒 鞭靴未難駐 曉又裁未錦不完 **遠近**
 集 洛葉衣さうハ霜の劍の其次○霜と劍と

そつひ又劍と霜とてこのふあり **本朝文粹奉行文**
 女雄劍在腰 **霜柱** **新撰六帖** 谷々々 若屋中
 則秋霜三尺 **霜** 霜心 したる冬こと

らん 光俊 **霜山朋** **同上** 山里の門田のあせの霜
 らん おち穂みらうく道也絶

冬 志

十月水魚と賜 公事根元 更衣の節会 小三献の後水魚と賜 **於**

の花 五出細き白花とひらく天和本草 狗骨本草 時珍を説ひしきふあつた木皮と煎じ鳥もち

枇杷の花 夏のひの部 枇杷 和漢三才 有之 実の条に注せ

鵝 雀の如し頭黒く白き尾あり俗霜降して領頬正黒 背翻反赤少く黒き尾あり翅の上白き羽黒き羽あり

又黄鵝 又黄鵝あり頁享式 古抄ふい渡鳥の部ふい其 名もとの声も朝霜の気色とひ秋ふ小鳥の多

三冬物水魚 名産あり他州ふあし伊勢江戸の江 宇治川は細代と打てささと取堅田ふては撞綱を以て

水魚の使 延喜式 山城国近江國水魚網 取り代一處其水魚九月より十二月

水面鏡 藻塩草 紐鏡と 書水のふとの

火鉢火桶 桐火桶 枕草紙 人の家ふ

干葉釣 ほの部

日吉祭 中の申の日の一年ふ両度あり夏の

野祭 上の申日一年ふ両度あり夏の部

日吉臨時 夏の部

祭 中申 公事根元 建曆三年十月十八日より始

めて殿上の使と立ち過る八月了迄 曆寺の衆徒長樂寺より官兵の爲ふ多く誅せ

らふ加ゆるの事をこそこのころ御願あり

冬

冬

冬

冬

日蔭の糸、日蔭の蔓この部豊明の日の

使この部御祭十二月於賣此の部節分の糸より出叶

十月子夏旬公事根元大々この義

紅葉散貞享式ふ古式とむとてく秋と兼

三冬物もち雪青藍云もち雪との詞増山の井とて下り後小撰る諸

抄なむらと假字とを書て故ふ名義明らるる

小より月令博物筌ふ雪の石又ハ木とてつりつり

同く餅ふとてつりつり寛文四年印餅雪

便秘集本梅盛撰 小米雪粉雪餅雪男文字とを書く證とて一毛吹草餅雪のとてつりつり木履の郎

重頼餅雪のとてつりつり十四日一年十月杜木祭小西

度あり夏の也和十二月孟宗竹寒竹の子天

本草和寒竹冬筍と生む又孟宗竹ともいふ色黒

細し○晋の孟宗至孝ふ後母筍と好む宗とて

冬月とて求むる宗竹林小入て慟哭これ為ふ

生む以て母供まると得るといふ占事小よりて

孟宗竹とていふと○鳳尾竹餅券餅米洗紀事

と孟宗竹とていふと○餅券餅造昔の

尾傭夫益夜とて木槌と肩より街衢と巡り高き

餅搗とて呼ば俗木餅と春と加都とて貧民を

と雇ひ以て餅と春む日開ハ暇とて餅の札

吾山遺稿江戶とて非人とも門々ふ立て餅券の祝ひとて

餅とていふひ得る家とていふ家とて印ふ門の柱

紙とて判りて張やくより餅花冬の上餅事

弱法師我門の餅餅の札 其角

冬、せ

